7
245

人那論

基督教文社發行

版權所有

2/303

支那論に題す

今や我陸軍已に牙山の兵を掃攘して、平壤に迫り、海軍また已に南陽灣に勝ちて、威海衛に迫る。思ふに海陸並び進みて、日章の旗を北京城上に樹つるの日、決して遠きにあらざるべき也。

此時に方つて、國民は唯だ勝利に醉ふのみ。何故に清國を征夷せざるかと問ふものあらば、彼等は唯だ清國が朝鮮獨立援助の事業を妨げたるが故に、之を懲伐すと云ふに止るもの多からんとす。然

れども日本國民が清國を征夷せざるべからざるの理、此に止らず。朝鮮に於ける彼等の不法不義の如きは、新に出師の機を作りたるに過きず。皇天の特寵を得たる日本國民は、其天職を行はんが爲め、亦た國民自衛の爲め、國家千百年の長計として、飽まで清國を征夷せざるべからざる也。此書一小册子と雖も、日本國民に代り、其の云はんと欲して、云はず。語らんと欲して、語らざる所を闡明したるもの也。

已に征清の師を出す。如何にして此局を結ばん乎。結

局容易ならざるの時は、外交上に於て、如何なる施設を世界に試むへき乎。是れ熱心にして、而も冷頭なる政治家の思慮せざるべからざる所なるを信ず。此書また之に關して、聊か建策する所あり。

手短く此書の大綱を叙せんに、其一『大なる日本』は列國の政治的、自然的の地理上より。天下の形勢一變して東洋の田舍國たる日本をして、大陸と接近して大運動を爲さしめずんば已まざるに至ると共に、經濟人口等の活力は、日本をして外に向つて『大なる日本』

を立てずんば已む能はざらしむるの形勢あるを論ず。其二『外交の憂、歐米にあらずして清國にあり』は、吾人已に大なる日本を建てざるべからずとせば、差向き此の大運動の衝に當りて我を妨ぐるものは、清國人なるを論ず。其三『清國其大を自覺するの日は最も危嶮の日也』は歴史に徴して、清國の侵畧的、山賊的性質を論じ、其國民的自負を生ずる時は、最も隣國に取りて危嶮なるを論じ、而して其自負は、今や其頂上に達したれば彼こそ最も『大なる日本』の妨害者たるを論ず。其四『人種的侵畧運動の大勢』は、英國のウヲズレー將軍が、世界を掩有すべき人種と云へる支那人種が、政治上に負けて、人種の爭に勝つの勢を叙述して、大なる日本の危嶮彼等より來るを論ず。其五『日清同盟論の迂謬』は、世に東洋の平和てう名を以て、日清を同盟せしめんと欲して、彼に讓らんとするものあるを排して、東洋を英國に進上するものとなし。其六『同盟論は何を贏し得たる乎』は、日清同盟の代價として得たる所は、東洋に於ても、世界に於ても、清國

の權力を增加せしめたるに過ぎざるを論じ。其七『兵火にあらずんば清人を醒す能はず』は、世界に文明を傳ふるは、古の希臘の如く、我國の天職たるを論じ、而して先づ支那に文明を傳へんとせば、兵火の光によりて其目を醒ますの外なきを論じ。其八『戰後の要償』は何を要償すべきかを論じ。一旦戰局を結ぶも再戰の已むべからざるを論じて、要償によりて戰の力を養ふべきを論じ。其九『進んで世界の舞臺に上るべし』は支那に對する大希望を貫かんには、兵力の外、外

交の力により日露佛三國同盟を作りて、以て之に臨み、世界の舞臺に上るべきを論ず。其十『二十世紀の權力平均』は日清の爭を以て『三十年戰』の時のスウヰデンと墺太利の爭に比しスウヰデンの力によりて歐洲に權力平均の生じたるが如く、日本の力によりて二十世紀の權力平均を生ずべきを論ず。

以上は多く已に國民之友、國民新聞に揭げたるものなりと雖も。方今の形勢、別に一小册子と爲すの已むを得さるを感ず。唯だ日露佛三國同盟論は、一昨年の

春同人に示したるものに止り、未た社論にあらざる也。

明治廿七年八月十五日

竹越與三郎識

大日本開化史

『支那論』の著者多年、思を潜めて國史を研究す。今や攜思略ぼ成つて、筆を取り、二千五百年間國民生活の變遷を畫かんとす。著者が如何に哲學的の眼光を有し、如何に政治家的の活識を有し、如何に雄麗典雅の史筆を有せるかを知るものは、獨力古今を網羅し、開化、編年、列傳等の史躰を打つて一丸子となし、東西史記の外、別に一史躰を創刱せる此の大著述を待つの同情あるべきを信ず。

刊行の期日、著書の冊數の如きは、猶ほ未定に屬す。

此書一たび出でゝ國史の上に一大光明を添ゆべきは、敢て疑はざる所也。

新日本史

支那論の著者によりて著はされたるもの、別に『新日本史』上中二卷あり。是れ曾て『マコウレー的評論とウエルベル的叙事とを雙ながら兼備せるもの』『愛蘭蘭の首領マッカルテーの近代史と彷彿す』『史學社會の妖冥』『眼光極めて公平、評實多く允當』『華麗雄渾、馬

高麗の如く山陽の如し』『當代無二の好著』『新日本歴史上の一新味』『詩人の筆ある歴史家』『燕派的臭味』『新日本のパノラマ』『マコウレー論文を讀むの心地す』『懸銳なる哲學的の眼光』『政治家的の歴史』等幾多の賞賛と罵詈とを招きて文學社會を震蕩したる者也。」

上卷は德川氏の末路より國會開設に至る政變外交の歴史にして中卷は思想、宗教、社會、經濟、の歴史也。讀書社會の狹き我國に於て出板の後僅かに二週間にして再板を重れ二年にして上卷は七板を重れて一萬餘部を殘賣し、中卷は二板を重ねたるを見て、少なくとも明治年間の一好著述なるを知るべし。

人あり新日本史を取つて、之を米國の人、グリツフヰス氏に送る。氏は維新の交、松平春嶽侯に聘せられて、兵制改革に盡力せるものにして、今や老ゐポストン晩隱丘畔に棲ふ。其我國に對する同感切深、日夕東方の時事に注目す。此頃遙かに著者に書を寄せて曰く、數ば日本近世史を見たり、然れども一も滿足する所なし。貴下の新日本史を讀みて初めて滿足し坐ろに維新當年の事を思ふ。而して恰かも愛蘭黨の首領ウヤスチンマツカルテーの近代英國史を讀むの心地す』と以て其如何に此書が人に快感を與ふるかを見るべし。

同じ著者によりて英國史の最高峰、『グロムウエル』の傳は編纂せられたり。苟も二百年間、識假面の下に拖れたる眞骨頭の男兒漢を知らんと欲せば、一讀せざるべからず。

『マコウレー』もまた同じ著者によりて書かる、是れ十二文豪の第三卷にして、政治家にして文學家にて、十九世紀初中英國文學の翹首にてマコウレー卿の傳説也。每日新聞は『マコウレーの如き評論』となし、三籟は『著者がマコウレーを評したる語は移して著者の文を評するに足る』となし日本評論は『現代の謳歌者、民政の熱中者、道義の扞護となし沼々論評し去る行中面白く讀まれたり』となし、朝野新聞は『批評精采文酷だマコウレリに似たり』となし教育時論は『其面白き我等の贅辯を須たんや』となし、文學界は『其文は行雲流水、紆餘曲折、急言せず、竭論せず、抑揚の妙を極むる事恰も著者が卿の文を評せしが如く、彼のアングロ、サクソンの實際的道德の思想を代表して批評界に立ち、歴史家の冷靜を有して政治界に立ち、政治家の活識を有して歴史界に立ち、坦々たる世途を歩みて死後に盛名を刻みし一個の英國紳士をして紙上に躍如たらしむ。』となし基督教青年は『著者已にマコウレー的評論家たるの稱あり、而して今や此傳記を著はす、故に行文極めて流暢

快明、天馬空に騁くるの狀あり讀者をして急流に乘じて兩岸の好景を眺むるの感あらしむ、』となし國會は『著者は我國のマコウレーを以て自ら擬するものなり、宜乎十二文豪中に於てマコウレーを選びしや、批評家、政治家、歴史家の三點に分つてマコウレーを批評し觀察精細文章流麗にしてマコウレーの精神氣象紙上に活動するを覺ゆ』となし都新聞は文章は溫藉にして典雅なり引證は豐富にして趣味に富み其觀接の點に於て最も輕妙を極むし』と爲せり

支那論目錄

第一　大なる日本……一

（一）世界の地圖一變せり……一

（二）世界の地圖再變せんとす……八

（三）活力外に溢れんとす……一四

第二　外交の憂、歐米にあらずして清國にあり……二六

第三　清國其大を自覺するの日は最も危險なる日也……三八

第四　清國人種的侵畧運動の大勢……五二

第五　日清同盟論の迂繆……六四

第六　同盟論は何を贏し得たる乎……七八

第七　兵火にあらずんば清國の惰眠を醒す能はず……八七
第八　戰後の要償……九八
第九　進んで世界の舞臺に上るべき也……一〇七
第十　二十世紀の新權力平均……一三四

支那論

第一　大なる日本（一）

竹越與三郎著

世界の地圖一變す

詩人よ汝の心を聽かれして天地の聲を聽取せよ。森も、林も、河も、海も、皆な偉しく、亞細亞の東方に大帝國の現出すべきを報ずるものにあらざるなし。樂人よ、汝の耳を澄して自然の音樂を聽取せよ。遠の軋しる音、雨の迸しる響、地につく屐の音も、皆な『大なる日本』が地球の表面に建設せらるべきを歌はざるはなし。況んや、興國の意氣、有爲の氣象、鬱勃として國民の間に磅礴す。曉星天にあ

り、曙色地にあり。『大なる日本』の曉は已に業に近きつゝある也。』

『大日本』の文字、如何に久して唱られたるよ。昌平黌の儒者より、源光國より、新井白石より、繩帶跣足の日本より初めて衣冠禮樂の日本となりし時、四書五經の文字以外に、日本的儒教を發見したるの時、豪傑割據の日本より、一轉して二百五十年一統の端を開らきたるの日、『大日本』の文字は國民的自信の標幟として用ひられたりき。然り一統の日本は、確かに割據分裂の日本に比して大なるに相違あらず。然れども是れ唯だ衣冠禮樂を有し、文物憲章燦然たるを示す、國民的自信の標幟に過ぎずして、外に向ては未だ曾つて『大日本』の實あるにあらず。雄心勃々、鄭成功を助けて、直ちに四百

餘州を三分せんと欲したる三代將軍の日本も、僅かに源光國をして、三百の黃金により、朝鮮日通信使の諂諛を買ひ得せしめたるに過ぎず。猶ほ朝鮮國敕日本王の態を免れざりき。覇氣欝然、孔子以外に門戸を樹てんとせる徂徠の日本も、高階暢谷をして、黃金によりて沈歸愚の門下生たらんと欲して能はざらしめたるに終り、大日本は四海に對し交通を謝して、以つて僅かに國安を保つに過ぎざりき。是れ實に我地勢が東洋の尾端に偏在し、海洋を以て大陸より疎隔せられ、地僻に化後るゝより生じたる必然の勢のみ。然れども吾人は今や眞乎に『大日本』の意義を實現して『更らに大なる日本』を建設するの時代に際會す。

日本は曾つて世界の田舍なりき。大陸の民は縱横飛舞、千萬里を馳騁するの時に當りて偏隅に隨居して、大陸的勢力に加入する能はず、大陸的恩光に浴する能はず。唯だ呆然として大陸的偉人種の演劇を傍觀したりき。然れども今や世界の地圖は一變しぬ。蒸滊船の發明せられし以來、海洋は列國の間を離隔する能はざるに至れり、大陸と島嶼との區分は、殆んど存せざるに至れり。若し大陸と島嶼との區別ありとせば、潮流、天風の便は、却つて關山千里の陸よりも往來の便を島國に與ふるにあり。此の如くして日本は十九世紀文明の賜の爲め、島國より大陸の仲間入をなしぬ。大陸文明は海潮よりも一層の速力を以て入り來りぬ。大陸的勢力は海水の如く我に密接し來りぬ。

我國と大陸との間は隣國の如く、千萬里の海水は髮の如くに直き大道に似たるものあり。此の如くして、我國をして大日本たる能はざらしむる第一の妨害は取り去られぬ。是れ我運命の第一回轉機也。』

シーザルの足もブリトンに止りぬ。ナポレオンの足も埃及に止りぬ。クロムウエルの足は未だ曾つて地中海に出でざりき。歐洲の豪傑は墓を歐洲に築くに忙しくして、亞細亞を省みるに及ばざりき。ペルシヤ、グリースの世界的大戰は夢の如くに記憶せられぬ。然れども名もなき商人は、豪傑よりも大なる計畫を實行し、歷史上の英雄が、區々として國中の小事に汲々たるの時、彼等は双脚にかけて世界を横行しぬ。此の如くして荷蘭は世界を顧客とする銀行家となりぬ。

西班牙、葡萄牙の領土は、熱天爍地の南島に拓かれぬ。頂骨固き英人は萬里の外に印度の大帝國を建て、餘鋒の及ぶ所、南濠に新天地を開拓しぬ。而して商利のある所、商人の行く所、政權之に伴ふて、印度より濠洲に至る一帶の地は、英國の所有となりて、東西兩洋の關鎖たる新嘉坡の海峽は、英國の旗を揭ぐるに至りぬ。歐洲の覇王を以て任ずるの佛人、何ぞ此の大事實を傍觀せん耶。彼等は安南に於て暹羅に於て、英領印度に匹敵すべき一大帝國を建設せんと經營しつゝ初りぬ。

凡そ以上の形勢たる、商利の存する所、商人の行く所、政權之に伴ふより生じたるものあり。歐洲の地、列國各〻帶甲百萬、寸隙の以

て乘ずべきものなきなり、國民の活力を最も抵抗力の少なき東亞に用ひたるより生じたるものもあり。兎にも角にも、歐洲大陸の勢力は東漸しぬ。政治家飛動の舞臺は、歐洲より漸々、東方に移り來りぬ。列國は歐洲の戰場を去つて、兵戰と商戰との場を東方に求めぬ。然れども彼等歐洲の强國は如何に東洋に飛舞せんと欲するも、彼等は到底、遠來の客也。懸軍萬里、東洋に勢力を伸張せんとせば、勢、東洋固有の勢力に依頼せざるべからず。誰か是れ此舞臺の主人公ぞ。誰か是れ此戰場の形勝を占むるものぞ。我日本國と支那とを除きてそれ誰かある。佛國にして安南より支那を蠶食せんと欲せば、我同盟の力を借らずして、爭でか其目的を遂ぐるを得ん耶。英國にして

佛國の東方大帝國建設を妨げんとせば、支那の力を借らずして、爭でか永久に之を妨たぐることを得ん耶。況んや東西百貨の流通、一旦我港灣に出入する船舶によらずんば、能はざる也。此の如くして世界の隱居國は、世界の勢力が、是非とも依頼せざるべからざる緊要國となりぬ。是れ我運命の第二回轉機也。

大なる日本（二）

世界の地圖再變せんとす

水火の文明によりて現に世界の地圖は變しぬ。而して今や更らに再變せんとしつゝあり。水火の文明は其勢如何に絶大なるも、水を變じ

て陸となし、島嶼を變じて大陸と爲すを得るも、大陸を變じて海と爲す能はず。之がために歐洲の港灣を出でたる舟は、マデイラの諸島に頼り、創世以來の大砂漠の一角ブランコの岬により、順風を待ち、風雨に休み、漠々際なき大西洋を窮めて、亞弗利加の喜望峰に出で、初めて愁眉を開き、更らに印度洋に出でゝ、新嘉坡の海峽によりて一萬五千七百里を經、赤道直下を過る二回にして、初めて東亞に入るの順序なりしがため、世界の變化は遲々として緩なりき。然るに一旦、佛人の智巧と膽勇によりて、千八百六十九年、スエズの運河を開鑿し、印度洋と地中海とを通ずるや、南大西洋の航海は全く止まりて、印度洋は天下の公道となり、歐洲の勢力は、落潮の

如くに、東方に押し來り、世界の形勢は頓に一變しぬ。

スエズ運河の開鑿せられし以來、二十五年、今や大膽にして畫策に富める米國人は、更らにニカラグワの地峽を開鑿し南北亞米利加を兩斷して大西洋と大平洋とを連續せしめんと計り、千八百八十九年に其事業を初む。若しそれ此開鑿にして一たび成らば、東亞と歐洲との間、一の陸地なきに等しく、兩大陸は目睫の間に接近したるに等しく、英國のポルツマウス港よりニカラグワまで四千六百五十里、ニカラグワより桑港まで三千里、桑港より横濱まで四千七百五十里にして、英國より日本に至るに赤道直下を經ずして一萬二千里にして達するを得べし。是れ桑港を經過するの里數なりと雖も、更に桑港

によらず、布哇に寄港して直航するものとせば、一萬里に減ずべし。之をスエズ運河を經、赤道の下を過ぎ、一萬一千七十七里にして初めて歐洲に入るに比す、其難易同日の談にあらず。之に加ふるに、ニカラグワの運河にして開けなば、從來、桑港パンクウバァの關門を經て、東西の物貨を吸取したる米國は、忽ち北大西洋に於て、幾多東洋の物貨を吸集するの關門を開かんとす。是れ殆ど亞細亞大陸と、米國大陸と、歐洲大陸と一所に接近せしむるもの也。此時に方つて其間に立つの日本にして、其必要と、勢力と、產業とを偉大ならざらしめんと欲するも得ざる也。吾國民にして眠らん乎。他國民は來りて、我を覺醒せずんば已まざる也。是れ我國運を進むる第三

回轉機にあらず耶。

平和の神は產業工藝の力を驅つて、世界の地圖を一變せんと欲するに方つて、戰亂の天使は更らに他の一面より地圖を一變せんとす。露國は其の國民膨脹の鋒を土耳古に向けて加へんと欲し、英、佛二國の爲めに抑へられぬ。此に於てか更らに亞弗汗の酋長を誘ふて、東印度大帝國の方面より南下せんとして、また英國の爲めに其口を扼せられぬ。此に於てか更らに浦塩斯德の港灣を利用して、露都より萬里の鐵道を布敷して、以て東亞に出で、其の多年南下の志を遂げんと欲するに至りぬ。此の如く土耳古に於ても、印度に於ても、而して東亞に於ても、露國を抑へんとするものは英國なるが爲め、

世界の二巨人は、我彼を殺さずんば、彼我を殺さんの境遇に立ちぬ。而して今日の勢、二巨人の衝突は、一面中央亞細亞に於ける陸戰となると共に、一面東方亞細亞に於ける海陸の戰とならんとす。此時に方りて、最も東方亞細亞に於ける形勢を占め、二巨人の戰に裁決投票を與ふるに足るものは我日本を措きてそれ誰れぞ。我を敵とするものは敗るべし。我援を得るものは勝つべし。勝敗の決已に我掌中にあり。吾人は已に東亞の田舍國にあらず。世界の强國と、袂を聯ねて周旋すべき一大國民也。此第四機會を運用して以て『大なる日本』を建設するの時、決して遠きにあらざる也。

大なる日本（三）

我國民の活力外に溢んとす

世界の氣運は我日本を偉大ならしめんとして、機會は朝夜旦暮に我前を過ぐると共に、內に於ける我國狀は、更に『大なる日本』を建設せざるべからざるの場合に迫れり。國狀とは何ぞ。國民の活力已に旺盛の頂上に達し、景行天皇以來寸尺を增さゞるの國土は、最早や之を容るゝに堪へざらんとする事是也。

外人多く開國以來三十年と稱し、三十年の新國としては、我文物產業の發達、意外に速且つ大なるものあるに驚くを常とす。然れども開國以來實は三十年にあらずして、三千年也。少なくとも大陸的文

明と工藝とに對して、對抗の地位を保ちつゝ初りしは、天下大亂に飽きて、治平を求めたる、慶長以來の事にして、猶ほ已に三百年の歲月を經たり。吾人は開國と共に國を立てたる布哇ニウヲーランドにあらず。開國以前已に社會を有し、國家を有し、文明を有し、產業を有せり。去ればこそ五港を列國に開きし以來、僅かに三十年にして、產業の進步は驚くべき發達を爲せし也。驚くべき發達と云ふよりも、其資本の用途は漸く已に窮まらんとし、資本と資本と相爭ひ、勞力と勞力と相爭ひ、會社と會社と相爭ひ、勞力も、金利も、共に共に其力を減じつゝ初まらんとす。是れ豈に識者が大に警戒すべきの時にあらず耶。

明治の初年にありては、金利は概して高かりしも、爾後財産の安全を加ゆると共に、事業の競爭を生じて、金利は漸々に失落し來りぬ。固より其間暴騰の事なきにあらざりしも、是れ會社熱、銀紙の差より來りたる急變にして、自然の勢にはあらず。自然の勢は、金利をして益す下落せしめずんば已まざらんとす。思ふに此勢を以てすれば、我資本の金利が、英京の金利と相異ならざるに至るの日、遠きにあらざるべし。過去二十年間の金利低落表は以て未來の低落を卜するに足る。

東京貸付金利表

明治七年	一、二九七	明治十七年	一、〇九二
同八年	一、一八二	同十八年	一、一三八
同九年	一、一九三	同十九年	〇、九一八
同十年	一、〇〇三	同二十年	〇、八七六
同十一年	一、〇四三	同二十一年	〇、九六七
同十二年	一、二一七	同二十二年	一、〇一七
同十三年	一、三一三	同二十三年	一、〇五〇
同十四年	一、四〇五	同二十四年	〇、九三三
同十五年	一、〇〇九	同二十五年	〇、八三七
同十六年	〇、七六〇	同二十六年	〇、七一九

備考　本表は東京銀行集會所の調査により貸付金千圓以上一萬圓までを標準とし其平均相場を表出せしものなり

是れ即ち國民事業の割合に、資本の餘裕あるの證據也。手短かに云へば國民活力の積聚せる富を運轉して、再製産を爲さしめんには、現今の國土は、餘りに小なるが故なりと云はざるべからず。

此に於てか此の富を導きて、更らに一層廣大なる場所に向はしむるの要ある也。畧言すれば更らに一層大なる日本を建設して、此富を用ひざるべからざるの要ある也。今を去ること二百年前世界の銀行者なる荷蘭は、正しく此の如き境遇に際會したりき。勞力は勞力と爭ふたり。資本は資本と爭ふたり。會社は會社と爭ふたり。事業は事業と爭ふたり。其結果として、金利は其最低度に下落し、技巧ある勞力者も、殆んど空谷に餓へんとするに至れり。此に於てか大膽にして識見ある政治家と商人とは、相共に世界に向つて『大なる荷蘭』を立て、資本と勞力の用途を求めんと欲し、アムステルダム、ロツテルダム、ヂルト、フールン、エンクエセン、ミツドブルク等

の自由都府、相聯合し、六百五十萬ギルダアの資本を以て東印度會社を組織するに至りぬ。遊離せる資本は外に向つて集められたり。勞力も、從つて輸出せられたり。東方の大般富は、荷蘭の資本と勞力を吸集して消化せり。此に於てか市上の資本と勞力は、活動し、己に競爭に疲れて倒るゝに垂んとせる小會社は、蘇生せり。斯くて一枚三千ギルダアの株券は、一萬八千ギルダアに上りて、猶ほ、之を買ふ能はざるに至せり。此の如くして地は日々に開かれ、資本と勞力は日々に輸出せられ、十八世紀には世界に向つて三十億ギルダアを貸しつくるに至せり。吾人の國狀は殆ど荷蘭の當時と相似ずや。固より資本と資本、勞力と勞力との衝突は、尙ほ荷蘭の當時の如く

ならざるも、其衝突は已にあり、競爭は已にあり。恐るべき結果の來る、決して遠きにあらざる也。

故に曰く吾人は『大なる日本』を建てゝ、資本と勞力を輸出し、使用するの場を求めざるべからずと。若しそれ海峽殖民地以來、濠洲諸島、至る所に日本人の新故鄕を立てゝ『大なる日本』を建るの曉には『大なる日本』の名の爲めに、飛舞欣抃するもの、豈に獨り、シヤウビニズムの愛國者のみならん耶。我資本家も、我勞力者も、我企業家も、實際利害の打算より、また欽舞せざるべからざる也。

且つそれ我國土の外に流溢せんとするものは、獨り資本と勞力とのみにあらず。我人種の繁殖力の强大なる、十四萬二千五十七方哩の國土は、往〳〵之を包容する能はずして、流溢の勢、止むべからざらんとす。現今我人口は四千七十一萬にして之を一哩四方に分配せば、二百七十五人九分ならんとす。之を他の列國に比するに已に人口充溢の點に達したるを見るべし。

面積一方哩に就き人口の割合

英國	三一四、八	（千八百九十一年調査）
澤地利匈加利	一七一、	（千八百九十年調査）
獨逸	二三六、七	（同上）
伊太利	二七六、〇四	（千八百九十二年調査）
佛蘭西	一八七、八	（千八百九十一年調査）
米國	一一七、九	（千八百九十年調査）
支那	二八九、	（同上）
日本	二七五、九	（明治二十四年調査）

其人口の稠密なること此の如し。是れ已に堪ゆべからず。然るに此稠密の人口は殆ど鼠算的に増加せんとす。過去は未來の明鏡也。如何に過る二十年間に於て我が人口の増加したるかを見よ。

明治五年	三三一一〇八二五
同十年	三五七六八五八四
同十五年	三六七〇〇一一八
同二十年	三九〇六九六九一
同二十四年	四〇七一八六七七

此割合を以て計算すれば毎年一百人につき一人一分餘の増加にして、現今四千萬の人口は、十年の後には四千五百四十二萬人となり、六十二年目、即ち吾人青年にして長壽すれば目擊すべき時期の内に於て、正しく二倍となり、其一億萬となるは八十三年の後にあらんとす。左の豫算表は之を示して餘りある也。

日本人口増加豫算表

年序	現在人員	増加人員	合計
第五年	四二、五四〇、〇七八	四六七、九四一	四三、〇〇八、〇一九
第十年	四四、九三一、八二四	四九四、二五〇	四五、四二六、〇七四
第十五年	四七、四五八、〇四三	五二二、〇三八	四七、九八〇、〇八一
第二十年	五〇、一二六、二九四	五五一、三八九	五〇、六七七、六八三
第二十五年	五二、九四四、五六五	五八二、三九〇	五三、五二六、九五五
第三十年	五五、九二一、二八七	六一五、一三四	五六、五三六、四二一
第三十五年	五九、〇六五、三七二	六四九、七一九	五九、七一五、〇九一
第四十年	六二、三八六、二二八	六八六、二四九	六三、〇七二、四七七
第四十五年	六五、八九三、七九三	七二四、八三二	六六、六一八、六二五
第五十年	六九、五九八、五六五	七六五、五八四	七〇、三六四、一四九
第五十五年	七三、五一一、六三二	八〇八、六二八	七四、三二〇、二六〇
第六十年	七七、六四四、七〇五	八五四、〇九二	七八、四九八、七九七

第六十二年	七九、三六二、二八四	八七二、九八五	八〇、二三五、二六九
第六十五年	八二、〇一〇、一五三	九〇二、一一二	八二、九一二、二六五
第七十年	八六、六二一、〇四一	九五二、八三一	八七、五七三、八七二
第七十五年	九一、四九一、一六九	一、〇〇六、四〇三	九二、四九七、五七二
第八十年	九六、六三五、一一二	一、〇六二、九八六	九七、六九八、〇九八
第八十三年	九九、八五九、二七八	一、〇九八、四五二	一〇〇、九五七、七三〇

それ四千萬の民已に安居する能はずして、朝鮮に、布哇に、南米に、北米に、南洋群島に利を追ふて轉移する日本人種已に數萬人ならんとす。之に加ふるに生活の困難を以てし、之を驅るに資本の衝突を以てせば、八千萬の民は到底、其新故鄉を海外に求めて『大なる日本』を事實の上より建てざるべからざる也。

『大なる日本』は愛國者の大言にはあらず、豫言者の夢幻にはあらず、

詩人の高調にはあらず、實際の問題也。利害の問題也。必然の勢也。日本國民生存競爭の唯一勝利法也。日本國民は其才能と、繁殖力との報酬として、今や波濤の及ばんかぎり、暖潮の流れんかぎり、南極星の光の照さんかぎり、暖帶的草木の繁茂せん限り、其新故鄉を求めて『大なる日本』を建つる天縱の權利を有する也。吾人は大日本を建設するの權利あり、吾人は此權利を用ゆるによりて生くべし。此權利を用ひずんば、吾人は國民的自殺を行ふものなり。我國民は唯だ大日本の建設によりて、內に溢れて相爭はんとする活力を外に洩らして、以て國內の安排、調和、整理を計るによりて生くべき也。

第二　我國外交の憂、歐米にあらずして清國にあり、

千萬尺の地底に於て壓抑せられたる水火は、千萬尺の高峰を劈ざき、火熔石となりて平原に漲る。天地の間一勢力の滅すべからざるを知らば、亦た何ぞ三千年間沈默したる日本國民が、今や世界の表面に於て『大なる日本』を建設せんとするを怪まん耶。『大なる日本』は實に三千年間の沈默に酬ゆる天縱の賜なる也。

天の與ふる、取らずんば却つて其の禍を受く。『大なる日本』を世界――亞細亞と云はず――の表面に建設するは、天、日本人民に縱るすの權利也。自ら此權利を放擲するは、即ち自ら他の邦國の前に雌

伏して、其封冊を奉ずるを甘まんずるもの也。邦國の世界に存する猶ほ人豪の國中に存するが如し。天命人心、或は人豪の上に下ることあるべし。然れども安坐拱手、以て天命人心を繫ぐべからざるを知らば、一國の安坐拱手するや、其の天縱の權、また必らず他に向つて移動するものなるを知るべき也。天命恒なし、唯だ自ら助くる者を助く。吾人は實に千歲比なきの時勢に際會して、與國の大機に遇ふ。吾人は自ら『大なる日本』を建設するの權利を擲つて、以て禍を子孫に遺すに忍びざる也。

『大なる日本』は夢なる乎。廟廊の上に安眠して、二十七年の泰平に其心腸を腐了せる軟骨漢をして、夢なりと信ぜしめよ。『大なる日

本』は一場の大言なる乎。東洋の孤島に偏隅し、世界の勢力に圍繞せられ、大陸の文明に後れながら、一朝世界列國と相交るや、萬邦の精英、天下の秀粹を咀嚼して、新且つ大なる國民を現出したる人種の能力を信ぜざる薄志弱行の學士をして、大言なりと言はしめよ。見よ、政治家、學士が博辨宏辭、自から高として、金章銀綬、獨とり誇こり、國人の血を以て一族の榮華を買ふの時、名もなき商人、工夫、冒險家は三寸の草鞋、五州を踏破して至る所に『大なる日本』を建設しつゝあるにあらず耶。

『大なる日本』とは何ぞ。自家の品質よりすれば國民の志望を高潔ならしむる也。他に對するの位地よりすれば國民の威望を強大ならし

むる也。而して其分量よりすれば日本國民の生活すべき範圍を擴張する也。其品質の進歩は今ま之を論ぜず。其位地と、其の範圍とは現に增進しつゝあるにあらず耶。曾つて百里の旅行を爲さんとするや、親戚故舊、涕を以て相別れたる日本人民は、南洋の地に群を爲して、鑛山を採掘し、砂糖を植へ、羊を牧するにあらず耶。曾て歐米人より丘墟に生れて丘墟に死する狐の如しと評せられたる日本國民は、朝鮮の海岸より、濠州の海底を我物として縱横しつゝあり。支那海岸より印度に至る一帶の沿岸國、また漸やく日本人を見んとし、歐米人をして世界を横行するは、獨り白皙人種の業にあらずと驚嘆せしむるにあらず耶。而して是れ僅かに明治十五年前後より初

まりたるの顯象のみ。若し十年の後に至らば、其形勢の變化如何。若し二十年の後に至らば其範圍の增進如何、若し五十年の後に至らば、東半球の全躰、米國の南半、至る所、日章の旗を見ざる所なきに至らん。『大なる日本』は、此の如くして人民の利害先づ起りて、國家の政權、之によりて打ち立てらるゝことあるべし。或は國家の政權を以て先づ道を開きて後、人民の潮流、之に加はることあるべし。兎にも角にも『大なる日本』は空言にあらずして事實也。夢想にあらずして必然の勢也。今や事實と傾勢とは日夜に吾人の前に起りつゝあるにあらず耶。吾人は安坐して『大なる日本』を世界に建設するの權利を放擲すべからざる也。

然りと雖も、吾人は一點の酸味を嘗めずして、林檎の美味を嘗翫する能はず、栗を食ふにすら其の外殼を去るの勞を免れざるにあらず耶。吾人は毫末の抵抗なく、微些の妨害なくして、『大なる日本』を建設し得べきものにあらざるを忘るべからず。否な此の妨害、抵抗を壓服し得るにあらずんば『大なる日本』建設の業空しきのみならず、其の妨害者に向つて、天縱の權利を捧げ、自ら其前に雌伏するもの也。敢て問ふ、誰か我興國の大業を妨げんとするものぞ。云ふまでもなし、當面最大の妨害者は實に清國也。南洋に於て我二萬の移住民と相角力せんとするものは、清國人にあらず耶。ウラヂオストックに於て我が商人を窘しめんとする者は、清國人にあらず耶。

米國の勞働社會に於て、我國人と相爭ふ者は清人にあらず耶。是等の人種的競爭の外、國家の政權を以てしては、朝鮮半島に於て我國家と生死の爭を爲すものは清國政府に在らず耶。凡べての方面に於て、我國家擴張の前途を遮ぎるものは清國也。苟も大なる日本を建設せんと欲せば、我が外交の深憂大患は歐米にあらずして、實に清國の上に存す。

方今の論者、口を外交に開けば、即ち必らず歐米の無禮を唱ひ、現行條約の一日も速に改締せざるべからざるを唱ふ。條約改正を斷ずるの一事に於ては、吾人の熱心、敢て人後に落つるものにあらず。然れども若し我外交の深憂大患、一に、現行條約に存じ、現行條約

を維持せんとする歐米列國こそ、最も以て我國民の公憤を洩らすべきものと思はゞ、是れ實に百年の深憂大患を繆り、敵味方の區別を知らざるの短見也。抑も歐米列國が、我國民に對して禮法上に於ても、政治上に於ても、少からぬ無禮と不義とを加へたるの事實は、今更らに列擧するを要せず。然れども是れ條約上に於て我權利の制限せらるゝ所あるより生ずる自然の結果也。現行條約にして、一たび改締せられん乎、彼此等しく同權也。また何ぞ其間に軒輊あらん耶。千里遠來の客は、固より吾國人の恩惠の下に生活せざるべからざる也。彼等は最早や、此上に政治上の交渉を我に加ゆるの決意と機會とを有するものにあらず。好し彼等にして、猶ほ政治的交渉を

加へんと欲するも、世は最早や少ナポレオン、パルメルストンの時代にあらず。露國はセバストポールの塞内に閉鎖せられ、日耳曼は散亂せる聯邦の收拾に忙しき時にあらず。歐洲の天地は已に昔日の天地にあらず、新なる勢力は、舊るき勢力を制肘す。決して彼等の一國をして、專制を擅まゝにせしめざる也。彼等の中、已に此形勢の變ると共に、我國力も、已に彼等の一等力の攻擊に抗衡するに足る、彼等は懸軍萬里、以て新進の日本と相爭はんとせば、歐洲に於ける勢力の權衡を覆すの覺悟なかるべからず。好し歐洲勢力の權衡を賭して進まんとするも、彼等は獨力以て爲す能はず。必らずや、日本以外の東洋の勢力に結托せざるべからず。之によりて之を見れ

ば、歐西の勢力を以て我國家の生存を妨ぐるものと爲すも、清國之に加はるにあらずんば、以て我に迫るに足らず、歐洲勢力東漸の點より見るも、清國は、また我が深憂大患にあらずして何ぞ。

若し仔細に清國との交際が、如何に將來に變化すべきかを思ふ時は、歐米十六個國の東方同盟に對する條約改正の如きは、些々たる小事と云はざるべからず。而して條約改正の事業すら、また往々にして清國の爲めに、嚇かさるゝの憂ありたりき。清國の法律の不完全なる、法官の不信用なる、到底心を安んじて我國人の生命財産を托すべきものにあらず。然れども條約改正と云ふ、彼是同權を基とせざるべからざるが故に、苟も兇暴陰險にして猥褻なる居留清人をして、我

法權の下に服せしめんと欲せば、勢其報酬として、また清國に居留する我國人をして、清國政府の法權の下に服せしめざるべからず。然れども是れ吾人の決して忍ぶ能はざる所。而して我國のみ、法權を我に收めて、清國に於ては我れ依然として治外法權を保たんと欲するも、是れ清國政府の敢て諾せざる所。此の如くして從來の條約改正事業は、往々にして人の知らざる清國の爲めに妨害せらるゝこと少からざりき。若し將來に於て、條約改正を斷行し、列國の治外法權を撤去して、居留地を廢するも、清國に對してのみ舊條約を維持せざるべからずとせば、是れ清國一國の爲め、治外法權を存じ、而して一の治外法權の存ずるが爲め、治外法權全躰の害惡は存ずる

也。是れ清國は將來と云はず、現在目下、我國內に於ても、また一の深憂大患也。

然らば則ち、吾人は如何にして清國に對せん乎。之と相結托して、亞細亞同盟を作り、和熟の間に、此利害の衝突を安排せん乎。抑もまた、斷乎として之を排擊して、以て我に屈せしめずんば已まざるべき乎。是れ日本國民が『大なる日本』建設の前に方つて、先づ解釋せざるべからざる至重、至大の問題也。

第三　最も危嶮なるは清國其大を自覺するの日也

清國果して我が與國乎、抑もまた國家百年の敵愾心を傾けて之に注がざるべからざる敵國乎。吾人が前論を草し終るや、朝鮮の風雲愈よ急にして、日清の軍隊、舳艫相含んで朝鮮に入り、國民の公憤は直ちに清國に向つて、開戰を宣布せんと欲するもの〻如し。然れども吾人の云はんと欲する所は、固より目下の狀態につきて立論するものにあらず。吾人は國家百年の禍福を推考して以て我國家、清國に對するの規摸方向を定めんと欲す。目前一時の狀態につきて立論

せば。日清和親論の唱首たる伊藤博文伯も、事情に迫られ、形勢に擁せられては、敢て開戰論に抗抵せざるべし。然れども此時の開戰論たる目前一時の狀態より來るものならば、驟雨の容易に晴るゝが如く、事終つて後ち、また清國と和協して、以て東洋の和平を保つべしと主張するに至らん。逐日政治家をして、『其の日暮らし』の政論を唱へしめよ。猫眼論者をして、形勢を追つて議論を變ぜしめよ。吾人は國家百年の禍福より立論せざるべからず。而して其の要先づ清國國性の、何たるより立論せざるべからず。

秦の始皇の國、漢の武帝の國、唐の大宗の國、成吉斯汗の子孫の國は、幾百年間、天下の視聽の外に沈み去りたりき。其近世に至りて

中外の耳目を傾動せるは、實に故歐洲列國兼任清國公使曾紀澤が、千八百七十七年歐洲を去らんとするに臨みて、アジャチック、クヲタリー評論に投寄せる一篇の論文より初れり。曰く清國は死せんとせるにあらず、眠れるなり。睡眠は皇帝の切愛せる北京宮殿の燒打せられたる兵火の光に照らされて覺めたりと。吾人は清國を以て死せんとせるものなりとも爲さず。また眠れるものなりとも爲さず。故にまた睡眠より醒めつゝあるものとも爲さず。彼は象種の如き大動物也。其生長は、日進月歩ならざるが故に、人の注目を惹くほどにあらずと雖も、確かに內亂、外患、苛政、酷刑、收斂、の中に於ても、其生長を廢せざりし也。吾人は唯だ生長と云ふ、進歩と云は

ず。何となれば彼は唯だ支那的形躰を大ならしむるのみ。其分量に於てこそ、增加したれ、其性質に於ては、敢て進歩と稱すべきものなければ也。然り進歩にあらずと雖も、彼は確かに生長せり。世界は生長せる大動物を見て驚駭して曰く、清國の將來は如何と。利巧なる曾紀澤は此の驚駭を靜めんとして曰く『吾人は睡眠せり、今や覺めんとす。其結果は如何。三億萬の民、夢覺めて其力量を自覺するの時、其力量を濫用して危險を生ぜざる乎。曰く否な。清國人は決して侵略的の人種にあらず、歷史は其の靜平なる人民なりしを證明す。何ぞ將來に於てのみ、然らずと云はん耶』と。然れども此保證ほど信ずべからざるはなし。支那人は曾て侵畧的人種にあら

ずと云ふ、已に虚偽也。歴史は之を證明すと云ふもの、また虚偽也。現今清國の大半を組成する漢人の祖先は如何なる人種なりし乎。漢の武帝が兵を四方に出して、侵略的政策を實行したる以來、歴朝の帝王、其の大勢力を自覺したる時は、即ち兵を四境に出して、外國を征伐せしにあらず耶。隋の煬帝が其勢力の頂上に達したる時は、即ち朝鮮を經畧せる時なりき。宋の神宗の其大を自覺するや、即ち北胡に向つて其兵を用ひつゝ初るの時なりき。若しそれ下つて今日の清朝と、其の起原を同うする元朝に至ては、侵畧の勢、更らに甚しく、其宋朝を覆して其大を自覺するや、十萬の兵をして、海を渡つて我日本を襲擊せしにあらず耶。明の惠帝、自ら其の大を自覺す

るや、懸軍萬里兵を安南に出して、其の獨立を奪ひしにあらず耶。秦始皇が初めて天下を一統したる以來の地圖を見よ。漢に增し、魏に增加し、隋に增し、大に唐に增し、元に增し明に至ては秦漢の二倍となれり。清朝に至ては已に大明一統の後を承けて、征畧の地少からしと雖も、猶ほカシユダルを征し、露國と鋒を交へたるにあらず耶。以上は支那に入りて帝國を樹立せる人種の侵畧史に過ぎず。若しそれ大漠を渡り、塞外に出で、歐洲列國を蹂躙して、羅馬城外に威武を輝したる支那人種の侵畧史を回顧せば、彼等は、殆んど山賊然たる天生の侵畧人種也。若し此の如き侵畧人種をも、猶ほ且つ靜謐なる人種と云ふを得べくは、是れ露西亞人を以て、天性最も柔

弱にして、平和を好むの民なりと云ふが如し。曾紀澤の言は遂に是れ外交官の常套口吻に過ぎざる也。

此の如く支那人種は、其大を自覺する時は、最も其本性を露はすの民也。其の山賊然たる侵畧を行ふの時也。而して清國は今や漸やく其の大を自覺せんとするの時也。其の最も侵畧的本性を露はさんとするの時也。侵畧と云ふ、必しも地を畧し、國を奪ふの謂にあらず。其大を以て人に誇り、其威力を他に致さんとするの謂也。而して最近二十年の歴史は、此天性の誇大根性を有する清國の政治家に更らに一層倨傲ならしむるの機會を與へたりき。千八百六十年（咸豐十年）英佛の北京を陷るゝや、清國政府は北京露國公使將軍イグナチ

ーフの爲めに誑らかされ、幾多の古砲を得て、黑龍江畔七百里の地を露國に與へたりき。今ヤクルヂヤの地に於て、曾國藩は露國と對抗し戰國策的の威嚇と僞兵によりて遂に露國南下の鋒を抑ゆるを得たりしかば、清國政府は自ら露國に對して其大を覺るに至りぬ。千八百四十二年には、英軍は長驅して南京に入りぬ。千八百六十年は、英佛の聯合軍は、虎の群羊を驅るが如くに、北京を突きぬ。愛親覺羅氏の子孫は英佛を以て、天魔破旬の如く、邀へ敵すべからざるものと信じぬ。今や千八百八十四年の役は、佛軍の爲め、福州馬尾の砲臺を陷落せられたりと雖も、安南に於ては、佛軍と交綏して、殺傷相當るを見て、佛人の必しも恐るべきものにあらざるを知りぬ。

此に於てか彼の政治家は、戰國策的に揚言して曰く、吾人は勝利の名を保つて、佛國と安南に和すと。此の如くして彼等はまた佛國に對して其の大を自覺するに至りぬ。彼等は已に佛人を輕ぜり。然れども英國に對しては、猶ほ積威の爲めに首を擧ぐる能はざりき。然るに英國の政治家は、東亞に於て露國を制せんには、清國を利用するに如かざるを知り、温言好語以て、清國を誘ひ、將軍、政治家、新聞記者、口を極めて清人を稱贊し、成吉斯汗の子孫は、世界を掩有すべき大人種なりと吹聽し、英國政府は千八百八十八年には、英、露、清の三國境を接するパミール高原の問題に於て、清國の助力を得んがため、ハンザナガルの酋長を冊立するの式場に、カシガル在

留の清國官吏を延きて、其承認を要するに至りしかば、清國は英國に對してもまた其大を自覺するに至りぬ。明治七年には、清國は台灣生蠻の爲めに日本政府に、償金を納るゝに至れり。是れ四百餘州も、以て新進國民に敵すべからずと信じたるが爲め也。今や明治十七年に至り、其の長怖したる日本兵士を韓京に殘害して、日本の勢力を韓土より一掃し、○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○、遂に日本恐るゝに足らずと爲し、日本に對してもまた其の大を自覺するに至りぬ。

此の如く二十年來、清國は着々として、其大を自覺しぬ。或は老死

より、蘇生せるものと爲すも可也。或は睡眠より、醒めたるものと爲すも可也。將た或は生長せるものと爲すも可也。兎にも角にも、大動物は正さしく其の大を自覺しつゝ初りぬ。請ふ其兵士の疎暴にして、山賊偷盗の徒に過ぎざるを嘲る勿れ。請ふ其の軍紀の散漫にして、烏合の衆に異ならざるを笑ふ勿れ。請ふ其の兵數を以て、八十五萬三千四百二十二方里の國を防禦し、四億六百二十一萬二千餘の人民を保護するに足らざるを笑ふ勿れ。有餘にもせよ、不足にもせよ、彼等は之を以て中華の大を以て、他に加ふるに足ると信じつゝ初りしは事實也。人或は其外交の迂僻なるを笑ふ。然れども英國の政治家が、『彼等は海軍將校としては最も拙也。陸軍將校としては

通常也。而して外交家としては世界有數の民なり』と云ひしが如く、國際法、道理、慣例、面目、利害、時間、空間の外に超然たる唯我獨尊宗の外交家は、其の四百餘州の大を以て後楯とする以上は、容易に侮るべきものにあらず。彼等は曾て己の外交の事に暗らきを恥ぢたりき。今や己は戰國策以來列國交渉の間に陶冶せられ、遺傳せられたる天生の外交家なるを自覺するに至りぬ。

彼等は此の如く、凡べての方面に於て、己の大を自覺しぬ。是れぞ正しく、彼等が其の山賊然たる侵畧根性を發露すべきの時也。其の傍近の國民に於て、最も危險なる時也。而して支那の近傍に國を樹つるもの多しと雖も、多くは其の猶ほ多少の畏怖を存する歐洲强國

の兵を以て守護せらる。彼等は未だ容易に其方面に向つて、侵略的威力を加へんとはせざるべし。彼等は必らず北京政府の所在に近く、北京政府の視廳に近く、而して其侵略的武器として、一たび用ひんと欲する海陸精兵の所在に近き、而して其の最も輕んずる所に向つて、其威力を加へんと欲するならん。知らず此の如き要所は、我日本の外、何れに存ずる乎。日本百年の深憂大患清國の外、何くに存する乎。吾人は決して清國を畏怖するものにあらず。然れども吾人は清國が、其の大を自覺したる時に方つて、最も先づ其眼中に映ずるものは、我日本なるを疑はんと欲するも得ざる也。況んや日本自ら『大なる日本』を世界の表面に樹立せんとして、其

威武を近傍に振はんと欲するの時、日清兩國の手は互に相觸れ、我汝を殺さずんば、汝我を殺さんとの危機に至るや、決して避くべからざる也。勢此の如くならば、吾人は猶ほ凡ての物を犧牲としても、山賊然たる國民と和平を購はざるべからざる乎。吾人は我光榮、我利益を擲ちても、和平を買はざるべからざる乎。吾人我が『大なる日本』を犧牲としても、山賊然たる國民と相結托せざるべからざる乎。到底我に威力を加へずんば已まざらんとする國民に向つて、凡べての物を犧牲として和平を求むとせば、此和平は百年の降伏の外、何等の實ある乎。

第四　其の人種的侵畧運動の大勢

北京政府は隣國の政府としては、最も不安心なる政府也。最も危險なる政府也、然れども彼等豈に、突として天外より飛び來れるものならん耶。此の如き政府を釀成し、育産する支那國民の性情に至りては、更に我『大なる日本』を妨遮する一大障害にあらずんばあらざる也。

『大なる日本』は今日に於ては政權の上より來らず、日本國民の膨脹性より來る。我政府が金力を盡くして、內亂鎭定の目的を以て兵備を修むるの時に方つて、我が名もなき相手商人は、浦鹽斯德に於て、

露國に對して商業的侵畧を行ひつゝあるにあらず耶。我政府は歐米列國に對して、飽くまで無事退讓の政策を取るに方つて、我が無一物の書生、無一文字の工夫は、深く南北亞米利加の內部に闖入して、進取的氣象を示しつゝあるにあらず耶。世界の海を家とするアングロサンの子孫も、其幸運破れて、最後の窮策を案ずるにあらざれば、濠洲に奔るもの少きの時に方り、我商人は、坦々たる大道を行くが如き意氣を以て、南濠洲に往來するにあらず耶。十七年の一敗に懲りて、意を朝鮮に絕ちたるの時に方つても、敢爲大膽なる國民は、二千餘艘の艦船を韓海に浮べ、九千餘の民は朝鮮の中に於ては隱然一國を爲すにあらず耶。而して二萬餘人の勤勉なる國民が、布哇の

熱天に耕すや、遂に平和的なる我政府をして、彼等の爲めに撰擧權を要求せしめたるにあらず耶。『大なる日本』は我國民の膨脹性より來る。而して最も的面に、最も手強よく、最も無慘に、我國民の膨脹性に抗抵せんとするは、支那人種にあらず耶。

支那人は世界に於て最とも繁殖し易き人種也。彼等は鼠族の如くに、殆んど自乘的に增加す。二十四朝、三千年、歷史は代朝革命の歷史にして、代朝革命の歷史は、人を斬ること草の如く、血を流すこと河の如き歷史也。他國の戰鬪は輜署によりて、勝敗あれども、淸國の戰鬪は敵を殺ろすの多寡にして勝敗す。然れども暫時の太平は、忽ち人口の繁殖を來たす。幾百千回の殘忍なる殺人戰の後、醫藥は草

根木皮に止るの國、衞生養生の術は未だ瘴毒を拂淸する能はざるの國にして、尙ほ四百二十九萬方哩の中に三億六千百五十萬の人口を含む。之を器械工藝の文明、保生、安命の技術、至らざるなき歐洲が、三百八十萬方哩の中に、三億五千七百萬の人口を有するに比して、豈に膨脹力あるの人種と云はざるべけん耶。吾人は我國民の繁殖力の甚しき、明治二十四年に於ては、一平方哩內に二百七十五人、九分に當るを見て、一驚を吃し、速に新故鄉を海外に求めざるべからずと云ふ。然れども醜つて支那を見よ。千八百九十年の調査によれば、彼は四百二十萬方哩の大國を以てして、已に一平方哩の中に二百八十九人を容るゝの割合にして、酒寒、熱暑、不毛、瘴毒、苛

政、悪習、洪水、疾疫、相參差したる國土は、人口繁殖に於いて却つて風光温和、民政寛にして保命の術行き届きたる我國土より、大なるものある也。夫れ其の繁殖の度、清國に及ばざるの我國民にして、四千萬の倍數となること六十二年の内にありとせば、清國四億萬の民は、之よりも一層迅速なる飛躍的增加を爲すべきにあらず耶。四億萬の民、倍數せる時に方つて、彼等は何の地に其の新故鄉を立てんと欲する乎。

思ふに彼等或は米國の野を襲ふの時あるべし。或は亞弗利加無人の地に塡塞するの時あるべし。然れども彼等の人種的侵畧隊の爲めに、最初の襲擊を蒙むるものは、必らずや、海峽殖民地より東南、黃海、

支那海の外、北緯五十度より、南緯四十度の間にある諸島なるを覺悟せざるべからず。現に彼等は暹羅安南に於て、其人種的侵畧を行ひつゝある也。人多く佛國の侵畧を云ふ。然れども其實は支那人種の侵畧こそ、最も彼等に取て恐しけれ、佛人ガストン、ランチエルの計算に從へば、暹羅人口一千萬の中、三分の二は暹羅人にして、三分の一は支那人に屬し、貿易工業の權、一に彼等の手中にあり。彼等は政府の財政をさへ受負ふ。安南に於ては、外人との競爭によりて、本土人種は屢〻失脚して、山間に退くに方り、支那人種のみは、泰然としてチョコーン市を保有して、其商工の覇權を揮ふ。故に佛人は之れを稱して壓すべからざる支那人種と云ふ。清國は其

人種的侵略を爲さゞるの時に方つてや、藩屬の名によりて、彼等の上に政權を振へり。彼等は英佛の爲めに、其主權を失ふ也、已に既に人種的侵略を行ひ、眼中、北京なき佛國の政治家をして、其將來を思ふて、慄然として恐れしむ。

英國が曾つて馬來半島を占領するや、其の人種は新文明を加へんには、餘りに劣等なりき。此に於てか五十人の支那人を招くや、移住の後、自乘的の繁殖力は、今は數十萬の馬來支那人を作りて、馬來は殆んど全く支那人の所有となりぬ。彼等は更らに濠洲に向つて、第二の暹羅を造らんとして、早くも其政治家をして痛語せしむ。

サア、ヂョン、ポープ、ヘンチッシーは香港の知事として、英清の

間に正義を執りしとの令命ある君子にして、決して唯我主義の英人根性を有するものにあらず。然れども支那の人種的侵略隊が、驟然として濠洲に闖入するを見ては、默する能はず、クインスランド、ウヰクトリヤ、ニウサーランド、シドニー等の爲め、大聲疾呼して支那人の侵入を禁ずるの已むべからざるを叫び、本國政府が印度問題に於ける支那の助力を慮りて、濠洲諸島の支那人拒絶論を採用せざるを攻擊して、計を失せるものと爲す。思ふに波露（ペルウ）の支那人追放を叫ぶ、また遠からざらん乎。若しそれ米國に於ける支那人の勢力に至りては、已に中外の耳目に慣熟す、更らに縷説するを要せず。露國の如きも政畧の上に於て、黑龍沿岸の地を清人より取るも、清

國は人種的侵畧を以て、之を廻復せんとせるがため、人口に貧しき聖彼得斯堡の政治家は、之がために其枕を安ぜざる也。

去ればこそ英國の將軍、ウヲルズレーは、支那人を評して、世界を奔馳する人種となす、曰く『時は來らん。支那人種はシベリヤより、西藏より、印度より、委陀として歐洲を侵畧し、露國も拒ぐ能はず、佛國も守る能はず、人種の波は、滔々として歐洲を侵して已まず。最後に此の恐るべき大隊と戰はんがために、英國は米國とアングロサクソン同盟を作りて以て之に當らん。時は寔に來るべき也』と是れ或は外交的、煽動の語辭ならん。然れども其政府の政權を藉らず、軍艦の保護を受けざる民にして、世界に向つて三百萬人の移住民を

發し、年々一億萬圓の富を本國に輸送せしめ、豚尾漢、無籍者の嘲笑の中に、其獨自一個を保ちて世界の富を吸集し盡さんとするの民は、決して侮るべからざる也。況んや其山澤の利は猶ほ未だ採掘せられず。文明的工藝は未だ國内に向つて試られず。若しそれ、天津の鐵道一旦吉林府城に通じ、左に走つて峽西、甘肅より玉門關に及び、魏秦幽幷の民、漁笛の音を聞き、創世以來、未だ曾て採掘せられざる泗川雲南の山澤にして開かれしならば、其經濟上に於ける吐呑の勢はそれ猶ほ海洋の如くならん乎。富は人口を益し、人口は富を益す。支那の内地開放の日は、四億萬の民一躍して五億となり、兩躍して六億となり、三躍し七八倍となり、人種の波濤は滔天の勢を以

て『大なる日本』の預定地に向つて決し來るの日也。

支那國民の勢威此の如し。若しそれ彼等をして、縱汜横溢、其行くがまゝに自由ならしめば、我日本人種は何の處に其新故鄕を立てんと欲する乎。吾人は『大なる日本』を何の地に拓かんと欲する乎。

清國政府の山賊然たる處行、或は止まることあるべし。然れども支那國民の人種的侵畧隊に至りては、決して止まる時わらず止まる所なからんとす。而して彼等の鋒は『大なる日本』を東洋より世界に拓かんとする日本人種に向つて、當面加はらんとするに方つて、吾人は猶ほ安坐、沈默、『東洋の平和』てふ文字の爲めに、之を傍觀せざるべからざる乎。日清國民の爭は、英露の爭の如く爾かり、英佛

の爭の如く爾かり、アングロサクソンとラテン人種の爭の如く爾かり。爭は當然也、必然也、人種的也。國民的也、國家的也。而して其爭根の深甚なる生死的也。必然生死的の爭を掩ふに、『東洋』てう地理的空名を用てして、以て百千年の深憂大患を養ふて、果して何の益ある乎。

第五　日清同盟論の迂謬

支那政府支那國民、共に將來に於て、我深憂大患を釀すべきの數、歴々として明か也。吾人は國民の公憤を傾け盡くして之に注ぐも、以て足れりとすべからざるを思ふ。此時に方つて、何等怯迂の徒か、日清同盟論を唱ふる者ぞ。

日清同盟論の大目的何くにある乎。彼等口を開けば即ち東亞の平和と云ふ。知らず吾人は『大なる日本』を犧牲としても、日本國民の光榮と利益とを損辱しても、東亞の年和を保たざるべからざる乎。平和は、凡べての物、何事よりも高貴なる乎。若し凡べての物、凡べての事を犧牲として、東亞の平和を保たざるべからずとせば、吾人は何人の爲めに平和を望む乎。吾人の凡べてのものを損耗して、以て東亞の平和を望まざるべからずとするも、論者が其平和の對手として示めす所の清國彼自身、已に東亞の平和を攪亂する戰亂の黒天使也。山賊然たる侵畧根性を有する國民と結托して、以て平和を謀ると云ふ。是れ盜賊と約して、一日の平和を計る支那內地の民と異なるなし。平和とは降服の異名に外ならざる也。

違し日清同盟論なるものは殆んど我國人の發明にはあらず、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇。〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇。英國の深憂大患は、一に露國にあり、

何となれば露國にして其の山國人種たる間こそ、英國をして、天下の覇權を握らしむれ。彼等一旦自由に天下を横行するの便ある海港を有するに至らば、英國は其の覇主の權を放擲せざるべからず。幸なる哉露國はペルチック海と里海の外未だ曾つて一の海港を有せざる也。ペルチック海より軍艦を發するも、一は迂遠にして軍國の急に應する能はず、一は條約の爲め大洋に出る能はざる也。此に於てか、英國は全力を盡くして、露國が海岸に近づくを妨ぐ。英國は第一に土耳古を教唆して、以て露國を此に繫きて、一歩も海岸に近づくを許るさゞりき。第二に亞弗汗人種を教唆して、以て露國に當らしめ以て其海岸に近づくを妨げたりき。露國は唯一、浦塩斯德の

海港を有すと雖も、一年の半ばは氷雪に密塞せられて、物の用に立たず。露國は今や四望して海に出るの道を望めども得ざる也。此に於てか東亞の强國と結びて、以て英國の勢力に當らんとするや、英國政治家は大聲疾呼、東洋の列國に警告して曰く、露國は東洋を呑まんとす。東亞の危機は迫れり。東亞は同盟せざるべからず。海軍は弊國之に當らん、陸軍は請ふ貴國之に當れと。此に於てか、英國の政論に心醉せるもの、一も二もなく相呼應して曰く、東洋の危機は迫れり。東亞列國は同盟せざるべからずと。此の如くして日清同盟論は出で來りぬ。故に日清同盟論は、また直ちに日、清、英三國同盟論となるを常とす。

吾人は東亞を以て安全なりと爲すものにあらず。然れども、列國各こ百萬の大軍を控へて、寸土萬骨に換へんとする歐洲よりも危險なりとするの理由を有せざる也。東洋列國の兵備、或は足らざるものあらん。然れども是れ相互也。若し歐洲强國の勢力を論せんか、長鞭もまた馬腹に及ばざる也。吾人は緬甸、安南、交趾の亡國を聞けり。然れども吾人は最も慘酷なるポーランドの滅亡は、歐洲の中原に於て、人類を傷ましめたるを見たり。吾人は清國が英佛露の勢力によりて其地を分割せらるゝを見たり。然れども世界の驕兒佛蘭西は、歐洲の中心に於て二洲を割き、十億の債を敵國に容るゝの大變に至れるを見たり。彼のルウマニヤ、セルヴヤ、西班牙、葡萄牙、

以太利の如きは、其國狀の危險なる、汲々乎として卵子を重ぬるよりも、險且つ急なるものある也。然れども彼等は未だ曾つて、アングロサクソン人種の同盟、若しくはラテン人種の同盟と叫ぶを聞かざる也。吾人は何を苦んで亞細亞なる地理的空名に拘泥して鈍喜翁(トンキホーノ)となり、山賊然たる戰亂の張本人たる、東洋平和の攪亂者たる、清國と同盟して、以て退讓し、吾人興國の大業を過つべけん耶。

〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇
〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇。〇〇〇〇〇〇、
〇〇〇〇〇〇〇〇。英國政治家が、人を愚にする猶ほ可也。自ら之
に唱和して、亞細亞なる地理的空名に向つて、熱涙を注ぐの政治家
に至ては、吾人、警醒の打撃を加ふるの禁ず可らざるを見る也。

試みに考へよ。日清同盟の大目的何れにある乎。必らずや之を以て、
東亞に於ける歐洲の勢力と相當らんと欲するにあらん。好し其目的
此にありとして、果して同盟の艦隊は其艦首を一にして、陸兵は其
鋒を一にして、以て歐洲の勢力に抗敵し得る乎。利害殊なれば向ふ
所も異ならざるを得ず。清國は黒龍江畔に於て、クルミヤに於て、

カシガルに於て、ヤーカンドに於て、パミールの廣原に於て、露國
と地を接す。曾國藩は虛喝を以て伊犁の地を露國より奪却せり。左
曾棠は賄賂を用ひてカシユガルの地を取れり。清國は在らゆる力を
盡くして露國と其寸土を爭はんとす。清國が一旦露國と鋒を交ゆる
の時日清同盟論者は、日本もまた海軍を以て、浦鹽斯德を封鎖し、陸
軍を以て吉林幽幷の守を助くべしと爲す乎。而して吾人は之により
て敵國ならざる露國を怒らしむるの外、我にとりて何の所得ある乎。
清國は更らに安南暹羅の地に於て、佛國と利害を異にす。清國已に
安南暹羅に於ける政權を捨つると雖も、其の國中に充滿せる支那人
種の多きや、清國政府は決して實際に、意を安南暹羅に絶たず、機

會もあらば、之に乘ぜんと欲して已まず。加ふるに英國の政治家は、佛人を此地方より追放せんと欲し、清國と英國が、佛國に對抗して利害を同うするの故を以て、清國を幇助して以て事を起さんと企つ。佛人が暹羅を攻擊せる時に、案外に手强よき抵抗を試ろみたるは、英人の他誰か之を助けたる。暹羅が佛國に對して、事を萬國の仲裁に一任せんと主張して、外交の上に佛國を弄せんとしたるは、英人の外誰か、其謀主たる。佛人の既得權なるメーコン河邊の權を爭ふに至ては、英國は公然其の形躰を現はして來りぬ。英清は已に明かに此地方に於ける、利害の一致を示しぬ。ガンドライ氏が、『支那と英國は安南、暹羅、東京に於て利害を同うす、是れ英清同盟の一大

關鍵なり』と云へるは、最も此中の事情に通じたるもの也。形勢此の如く、英國の政治家常に北京政府に結托して、排佛の畫策を企つるとせば、佛清の爭、即ち事實に於て、英清對佛の爭、何の時にか破裂するかを知るべからず。日清同盟論者は、此時に方つて我海軍を以て、清國を助けて、佛人を追ひ拂ふべしと爲す乎。吾人は佛人に怨なし。寧ろ相親しむの民也。吾人は露國に恨なし、寧ろ相解するの明ならざるを惜しむの民也。吾人は亞細亞なる空名の爲めに清國と同盟し、我宿敵讐怨にあらざる、寧ろ我興國の大業に取りて便利を與へんとする佛露を敵視して、攻擊して果して何の得る所かある。抑もまた吾人は此同盟を藉りて守らざるべからざるの弱點を何

の處に有する乎。國小と雖も、勢專ら也。歐洲の勢大なりと雖も、強弩の末魯縞を穿つ能たはず。吾人は自ら我國を自衛するに足る。吾人また何を以て、損は多く、益は毫も來らざる日清の同盟を結び て、以て我兵を勞らし、徒らに清國を肥すの愚を爲さん耶。

且つそれ日清英の同盟は、徒らに清國を大ならしめて、東洋覇王の權を取つて、之を彼に與ふるものたるを覺悟せざるべからず。人は利害の多き所を重んずるもの也。英國は清國に對して、切つても斷れぬ腐れ緣を有す。清國と外國との貿易は、天津より打狗、虎自に至る二十五港を通じて、明治二十二年に外國より輸入せしもの一億一千三百二十七萬六千兩にして、此中英國及び其領地より輸入せし

もの、九千五百五十七萬九千二百兩に達し。また同年清國より輸出せし物品は、九千五百六十三萬兩にして、此中英國及び其領地に出でしもの五千三百八萬八千兩に達す。即ち英國は輸入に於ては、全躰の九分、輸出に於ては五分を占む。其利害計算の上よりして、東洋と云へば、直ちに指を清國に屈し、日本を以て物の數とも數へぬが如き樣あるは、毫も怪しむに足らざる也。況んや英國が露國とパミールに事あるの時、先づ要する時は清國の助力也。況んや佛人を暹羅に食ひ止めんとする時、最も要する所は清國の山賊兵也。否な此よりも一歩を進みて、彼等は清國をして、獨りカシユガル地方に於て、露國と對抗せしむるを不安として、憂心仲々、直ちに英國

の領事官をカシユガルに配置し、名を貿易に托して、以て露國の擧動を監督せしめんと期す。勢此の如くに清國を恃む。彼が吉林城に居る山賊然たる清兵を見て、世界有數の兵なりと稱揚し、諒山近傍の追剝兼帶の清兵を以て、ナポレオンの子弟よりも勝れりと稱するも故なきにあらず。吾人は如何なる場合に於ても、英國が清國と相○○○○○○○○○○○○○○。○○○○○○○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○、○○、○○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○。○○○○○○○○○○。○○○○、○、○、○○○○○○○○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○○○

○○○○○。英清は戀人也。吾人は戀人の中に入るも、其愛情を分つ能はざるや初めより明也。日英清の三國同盟は、是れ我れ、强ひて戀人の間に入らんとするもの也。徒らに清國の强大を爲すもの也。吾人は敢て斷言す。今日に方つて地理的空名に拘泥して、東亞同盟を唱ふるものは、是れ英國政治家の政略に陷り、東亞に熨斗をつけて之を英國に進呈する者也。

第六　退讓政策は何を贏ち得たる乎

吾人は日清同盟論の迂繆を論破せり。然れども猶ほ其懷に釋然たらざる者ある乎。請ふ十年間の退讓は、如何に彼を驕傲ならしめ、如何に我を侮慢せしめ、如何に世界をして東洋覇主の名を清國に與へしめたるに止りし乎を回顧せよ。

清國を輕侮するは明治の初年以來我國民の常情なりき。吾人は彼等が文明を解せざるを見たり。吾人は彼等が歐人に屈辱せらるゝを見たり。吾人は彼等が國防を有せざるを見たり。吾人は彼等が舊物を保守して、得々たるを見たり。此に於てか思らく、清國與みし易きの

みと直ちに豚尾斬るべし、頂骨蹴るべしと云ふ。此時に方つて我國民の眼中殆んど清國なき也。然るに北京の政治家は、吾人が想像せるよりも政治家的の力量ありき。彼等は能く財を積むの道を知ると共に、能く財を散ずるに於ては、世界に匹なき人種なり。吾人が文明により、進歩により、獨立により世界萬民の識認を被らんとして、銳意する間に、彼等は金錢を以て、清國の勢力を世界に廣告せんと○○○○○○。○○○○○○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○○。此に於てか進歩と、獨立と、自由を得んがためには、何物をも惜しまざる日本が、世界の識認を得ずして、苦

心煩悶する間に、進歩なく、文明なく、自由なき清國は、天下の一大國として認せられ、軍紀嚴肅なる我兵は、小兒の兵と嘲らるゝ間に、軍紀なく、練なき清國兵は、世界有數の勇兵なりと稱揚せられぬ。而して其政治家李鴻章の如きは、東洋のビスマークを以て目するものあるに至り。反動の波は忽ち我政治家をして、清國に過重の頼を附せしめ、萬事を讓るも、其の歡を失せざらんことを務め以て他日同盟の地を爲さしめぬ。

明治十一年に北米の前大統領グランドの來聘を機として、琉球の處分を托して、其仲裁によりて宮古八重山の二島を清國に與へんとしたるが如き、十七年に朝鮮京城の變に手を引きたるが如き、豈に此

の退讓主義の結果ならず耶。吾人は已に和親の意を以て退讓しぬ。忍ぶべからざる迄をも忍びぬ。十年養ひ來れる朝鮮に於ける勢力をも捨て、軍事教育の權をもすて、侮辱せられたる我婦女の爲め、殺傷せられたる我男子の爲め、要償をも爲さずして、以て事局を平和に結着せしめぬ。是れ豈に退讓の最も大なるものにあらず耶。請ふ此くまで深き退讓と、好意とは、何を以て酬はれたるかを見よ。十七年京城の變ありし翌年、彼れ北洋艦隊の全隊を擧つて、我内海に乘り込みて、威武を輝かし、長崎に於て我警察官を凌辱して、鬪爭を起こし、僞證百方、我を辱しめたるにあらず耶。朝鮮に於ける我勢力を駆逐して、一個人の商業までも、妨害したるにあらず耶。

朝鮮の刺客を助けて、生を我國に托したる金玉均を謀殺せしめて、我治安を害して怙然たるにあらず耶。最後にパミール高原の權をすて、露國をして全く手を朝鮮より引くを約せしめ、朝鮮王を廢して以て一省となし、日本をして全く其手を伸すの所なからしめんと、大膽なるの計畫を爲せしにあらず耶。吾人が退讓によりて、二十年間清國より得たる所の賜此の如きに過ぎざる也。吾人は何を苦しんで、復び此の退讓を繰り返さゝるべからざる乎。

且つそれ清國に對する對讓は、獨り朝鮮に於ける清國の勢力を增加せしめたるのみならず、歐洲列國の眼中、明らかに惡政の支那を以て、野蠻の支那を以て、非文明的の支那を以て、東亞の覇主と識認

せしむるに至れり。

一例を擧げん乎。朝鮮の巨文島は明かに朝鮮は屬するもの也。曩爾たる小嶼と雖も、之を使用せんには、朝鮮主權者の承諾を要するの外、何人の約諾をも要せざる也。然るに明治十八年、四月、即ち朝鮮京城の變後半年、中央亞細亞のペンジデーに於ける葛藤、英露の二國をして、暗に戰備を爲さしめたる時、英國政府は卒として英國東洋艦隊提督に令して、曰く『巨文島を占領せよ』と此の如くして、朝鮮の領土は、一夜にして英國の旗を飜すに至れり。然るに清國が此占領に對して苦情を唱ふるや、往復數回の後英國の外務大臣ローズベリー卿は、清國政府に申込みて曰く、清政府若し巨文島を外國に

占領せしめずとの保證をなさば、英政府が同島占領の一目的は已に達したるなり、若し清政府にして此責任を引受るを欲せずば、宜しく露國及干繫諸國に向ひ、朝鮮の獨立を保證する國際條約整定の申込みをせられ度し、此申込若し容らるれば、英政府は無論之に加入し、巨文島は朝鮮の管内の一部と認めらる可しとの默契を以て、直ちに同島を引拂ふ可しと。是れ明かに清國を以て朝鮮の主國となしたるもの也。清國は朝鮮を以て、己の屬國とするに於て、天津條約は些の己を製肘するものにあらずと爲して、英國に應接せるもの也。而して清國政府は英國の申込によりて、直ちに露國と交渉して、露國も決して巨文島を占領せざるべしとの約諾を得て、之を英國に通

牒し、遂に英國をして、巨文島占領を廢棄せしめたり。是れ朝鮮を以て、清國政權の下にありとするもの、獨り英國のみならず、露國もまた然る也。豈に唯だ朝鮮に於ける清國の主權を認むるもののみならん耶。實に清國を以て東亞の覇主と爲すの處行に外ならざる也。』

夫れ過去は未來の明鏡也。二十年間の退讓政策は、清國を驕慢ならしめ、世界をして東亞の覇權を清國に與しむるに終りしを見れば、將來もまた知るべからず耶。吾人は復び過を重ぬべからざる也。吾人は地球の表面に於て大なる日本を立てざるべからず。至る所の列國の首府に於て、我國人をして『我は日本人なり』と自負せしめざるべからず。人若し不法を我に加ふるものある乎。吾人は『汝如何

なれば日本人なる我に、不法を加ふる乎』と叫ばしめざるべからず。羈馬人の自由に天下を縱横したるが如くならざるべからず。之が爲めには先づ歐洲列國をして、我實力實權の如何に偉大如何に强烈なるかを解せしめざるべからず。而して歐洲列國をして、我實權實力を解せしむる豈に他あらん耶。彼等が輕侮の中に恐怖を寓し、蔑如の中に憂慮を抱き、中心、之を以て世界の一大國民と爲す所の清國を懲らして、頓首再拜我前に降らしむるの外なき也。

第七　兵火にあらずんば文明を清國に傳ふる能はず。

吾人は已に繰り返せり。人種の上より、商業の上より、歐洲との交際の上より、略言すれば、『大なる日本』建設の妨害者として。清國を討伐し、國民百年の公憤を、之れに向つて注がざるべからず。然れども事是よりも大なるものあり。吾人は東洋に對して文明を宣傳するの大天職を有す。而して東洋に對して文明を宣傳せんと欲せば、勢先づ、清國に向つて文明を宣傳せざるべからざる也。十八世紀の末、歐洲の原野に磅礴したる革命の氣焰は、凝つて佛國

に集りぬ。佛國は革命主義の燒點となりて、自ら破裂しぬ。此に於てか、其聲は萬雷の轟くが如く、全歐に響き、兄弟主義の羽書の飛ぶ所、平等主義の演說の達する所、悉く革命の氣焰を鼓し來り、歐洲は恰かも一大火爐の如く、遂に近世歐州の新面目を生ずるに至りぬ。亞細亞に於ける我國民の位置は、正しく佛國の歐洲に於けるの位置にあらず耶。十九世紀文明の星は、我分野に宿り、我をして悉く其の英華を含み、其秘密を解せしめたり。吾人は之によりて、武斷政府を顚覆して、明治政府を樹てたり。吾人はまた進みて憲法を獲たり。國會を得たり。自治制を得たり。是れ豈に東洋に於ては、振古以來、未だ曾てあらざる一大革命的行爲にあらず耶。顧みて自ら

例る。吾人が爲したる破天荒の革命的行爲は、何が故に全亞細亞を振驚せしむること、佛國革命の全歐を震驚せしめたるが如くならざる乎と。

嗚呼吾人今にして之を解し得たり。清國は久しく東亞の覇主として見られたり。清國にして動かざる、決して東亞を動かす能はざる也。且つ東亞と云ふ、清國を除きて幾何の國家がある。地廣く土大なりと雖も、人心荒みて神經遲鈍に、容易に我が破天荒の事業に感ずるの能力あるなし。何ぞ其のフランスの革命が、歐洲を動かしたるが如き、大快事あるを望むべけん耶。此に於てか吾人は東亞に對して、文明を宣傳せんと欲ぜば、勢先づ清國に對して、文明を宣

傳せざるべからず。清國は如何。彼れ果して廣量、大度、豁然大悟して、文明を承くるの氣象と、力量とを有する乎。

吾人は此に至りて、端なく支那經書の文明と、支那現今の文明の差異を論ぜざるべからざるの地に立てり。支那と云ふ、人直ちに孔子を聯想すと雖も、現今支那の國民的思想の中には、正經中庸なる孔子の道德は、全く存せざる也。大低、支那國民の組織は、學識ある紳士(君子)は之を朝廷に收用し、無學なる野民(小人)は、之を野に放つを以て要點とす。是れ、文字ある者を野に措きて、爭亂の種子を蒔かざらしめんがためにして、所謂る野に遺賢なからしむるもの、支那歷代の政策也。從つて孔子の敎なるものは、朝官縣吏に收用せ

らるゝ少數紳士の間に唱らるゝのみにして、絕へて國民の間に根據を有せず。而して少數紳士の間にすら、實際の生活に入るものにあらず、僅かに詩文の間に發揮せらるゝ一の空想たるに過ぎざる也。

斯れば一般の野民に至ては、迷信、蠻野、風を爲し、或は幻術の大成門を信じ、孔孟以下歷代の聖賢は、飛星羽化して、羽仙となれりと信ずるものあり。道敎を信じて、修業して仙を希ふものあり。白蓮會に入りて、紙馬豆兵を用ゆる黃巾の如くならしむべしと信ずるものあり。喇麻敎を信じて、化身現世を信ずるものあり。之を要するに、其の思想は依然たる陰陽五行說也。鬼神に侫して、福を求むる也。幻術を求むる也。德に進み身を修むるの思想に至ては、絕て國民的

思想にあらざる也。故に支那國民の間、唯だ爭ふ所は利あるのみ。若し人性に長く相接するより生ずる情染（アッフェクション）なるものなかつせば、支那社會の土崩瓦解するや、久しからん。

迷信薄俗此の如し。故に開以來已に五十年。民は依然として、鐵道を以て風氣を害すと爲し。採鑛に抗ずること、漢唐宋時代の如く然り。電信を惡み、外人を忌むこと、惡魔の如く甚し。二十世紀の曙は已に近づけりと雖も、彼等は依然として暗黑の中に住みて、其の愚光に接する能はず。大守の政は、漢代以來の如く、亂虎に似たれども爭ふ能はざる也。總督の治は、藩鎮以來の如く、擅制、收斂、至らざる所なしと雖も、革むる能はざる也。彼等は却つて國會を有

し、憲法を有する吾人を嘲つて、歐化せられて、國本を失ふものとなす也。却つて理化工藝の術によりて、天然力を驅使する吾人を笑つて、自ら七竅を穿つて死する痴人の如く云ひ爲す也。僅かに日新の文明を執らんとするものあれば、目するに國躰を破り、天朝に背くを以てす。僅かに弊政を謗るものあれば、探偵は誇大なる報告を作りて。殺死せずんば已まざる、水滸傳中の宋江の如くならんとす。

獸從は彼にありて忠義と解せられ、無智は最上の君子として賞せらる。現今の攝政大后は則天武后以來の傑物にして、また則天武后以來の醜聞ありと雖も一人立つて之を爭ふものなく、雄藩を守る總督すら、唯だ一家を富ますに急にして、國民が迷信、淫慾の間に醉生

夢死せんとするを見て、之を振作する能はざるのみならず、また從つて之を愚にせんと欲す。文明をして自ら其の力を逞ふせしめよ。彼等は自滅するの外なき也。彼等はモーゼあるを知つて、今日あるを知らざるヴユス人種の如くならん。孔子あるを知つて今日あるを知らず、歴史あるを知つて進歩と理想あるを知らざる、東方のヴウスとなりて、天が下を蹣跚するの外なけん。吾人は東方文明の曉星に當る、決して之を傍觀すべからざる也。

蓋し政治上に於ては、東洋の地理的空名に頓着すべからずと雖も、人情の大道に準據して、文明の恩澤を傳へんと欲せば、必らず先づ我傍近より初めざるべからず。吾人は東亞に文明を與ふるを以て滿

足するものにあらず。吾人の抱負は之よりも大也。唐宋大陸の文明を咀嚼して、朱子、王陸の外に、否な孔門以外に、門戸を樹てんとせる我國民、仁義忠孝の道德を習ひ來つて、一種の勵爵士的(シヤルツク)儒教を作り、國民生活の根底まで打込みたる我國民、印度大陸の宗教を吐呑して、日本的新宗教を作りたる我國民は、泰西文明を咀嚼して、之を新化して、却つて泰西を照らすこと、希臘文明の東方に淵源して、却つて東方を照らすが如くにせずんば已まざらんとするの抱負を有する也。然れども千里の道、歩するに足下よりせざるべからず。吾人は泰西を反照するの前に、先づ傍近を照らさゝるべからず。是れ東洋の花彩島を以て、温和なる氣候を以て、咀嚼、融通、批評の

天才を以て、廣量大度なる心胸を以て、吾人に特寵を與へたる皇天が、吾人に命ずるの一大天職たり。吾人已に皇天の特寵を受く。吾人は文明宣傳の大職分を怠るべからざる也。

然らば即ち、吾人は如何にして文明を傳へん乎。吾人は今日に於て、兵力を以て文明を傳ふるの外なし。曾紀澤自ら其の支那論に於て明言して曰く、北京宮の兵火は、支那政府の惰眠を覺ましたりと。英佛の同盟軍が、北京宮を燒打せしより已に三十五年。長夜の眠今日に醒めず。文明は依然たり、心靈は依然たり、迷信は依然たり、人權の讀認せられざる依然たり。正義の伸びざる依然たり。君主の神明に擬する獨尊的氣習依然たり。社會の人道依然たり。唯だ異なる

所は山賊的なる無情酷薄の兵士が、泰西の利器を掘り、堅固なる砲臺を有するの一事に過ぎず。泰西の利器は、愈よ其心を驕らし、堅固なる砲臺は、文明の浸入を防ぐの利器たり。文明の利器、蠻人の手に入れば却つて文明を妨ぐるの利器となる。吾國民は最早や躊躇すべからず。大日本の建設のため、山賊然たる國民に對する自衛のため、正義の名により、人道の名により、文明の名により、上帝の前に於て、萬國の視聽の前に於て、堂々乎として劍を取つて、清國に擊つの權利を用へ、兵火によりて其の惰眠を覺さんとするも眞に已むべからざる也。

第八　戰後の要償

吾人は自衞の名により、大日本擴張の名により、正義の名により、文明の名によりて清國と戰ふて之を壓服せざるべからず。假令ひ朝鮮侵略の事實なきも、吾人は戰火によりて其迷夢を攪破せざるべからず。今や朝鮮獨立の擔保を得んがため、吾人已に戰端を開らき、其軍艦操江を擒らへ、其軍艦廣乙をして自焚せしめ、其の軍艦濟遠をして遠く遁逃せしめ、頻りに牙山成歡の陸兵を追ふて海に擠す恩ふに海陸兩軍の兵、清兵を朝鮮より追ふて一掃するの日遠きにあらざるべし。此の時に方つて渤海の固何ぞ守るを得ん。若し我外

交と軍隊とをして、相并進して支吾なからしめば、若し我軍隊と國民とをして、相結托して離隔せざらしめば、我兵長驅して天津に入り、北京を衝くの日は期して待つべき也。

然らば即ち此役、吾國民の大目的は悉く成就すべき乎。曰く否な。彼をして朝鮮に對する屬邦の空想を捨てしむるは爲し得べし。我大日本の妨害者たるを斷念せしめ、文明を宣傳するの大業は、決して此の一戰によりて全く成就し得らるべきものにあらず。大衝突の後に大平和ありと信ずる大豫言者をして、其の豫言を信ぜしめよ。吾人の大目的を達するまでは、猶ほ數回の戰爭を要す。明治十八年佛軍が十一艘の軍艦を打ち沈めてあらゆる砲臺を粉碎したる大戰の時

も、北京の米價は變動を來たさゞりしと云ふにあらず耶。電信、鐵道、新聞、有志家なき四百餘州、無神經なる四億萬の民は、一戰によりて震驚し、長夜の夢より醒めんには、餘りに絶大なるを忘るべからず。眞乎彼をして大日本の妨害者たらず、我文明の宣傳を承けんには、猶ほ數回の侵擊を受け、內亂によりて、天下分裂、銳氣勃々たる新朝を生じたるの後を俟たざるべからず。故に吾人は我軍隊の善戰に依賴すると共に、此一戰に餘り多くの重味を附して、我大業已に成ると思ふべからず。須らく此一戰によりて、我國力を肥やし、以て他日の再戰に具ふるの覺悟なかるべからざる也。

如何にして我國力を肥さん乎。第一は此戰爭によりて生ずる損害の

要償及び罰金として、金貨五億萬弗を拂ひ込ましむべし。吾人が金貨と云ふもの抑も故あり。東邦一帶は近年銀貨國となれり。之がために我國民の如きは、已に銀紙價格の差異によりて、非常の損害あるの非運を免るゝと共に、今や金銀價格の差違によりて、又輸出入の際に非常の損失を招くを免れず。人或は詭辯を弄して、銀貨國は却て輸出を增すによりて、得る所ありと云ふと雖、事實に於て銀貨國の富の價格が、一帶に下落するは決して悅ぶべきの事實にあらざる也。去ればこそ吾人は如何なる方便を用ゆるも方便あらば、金貨本位の制を建てざるべからず。幸なる哉、淸國に勝たば、彼れ無數の金銀を有するに係らず、燒眉の急の爲めには、必らず其最も親交

ある英國、若しくは獨逸の市場に於て公債を募らん。是れ清國の手によりて歐洲の金貨を輸入し來りて、以て我幣制を改革するの好機會にあらず耶。吾人は千八百六十九年、獨逸が佛蘭西に勝ちて十億萬の金貨を要償し、以て其貨幣制度を改革したるは、吾人の學ぶべき好方法にあらず耶。苟も幣制一たび立つ、吾人は歐米に對して、また經濟上の勝者たるを得ん。豈に唯だ清國に勝つと云はん耶。第二、條約を改締して我權利を伸張すべし。我國は積威の壓する所となりて、歐米諸國と同種類の條約を清國と締結したりき。今や我政府は勅令百卅七號を發して清國人民を我法權の下に支配するを布告するに至り、清國人民は、一方に於ては從來の二府五港の居留

地に其住居を制限すると共に、全く我法權の下に屈するに至りぬ。此に於てか舊條約は全く滅絶しぬ。是れ一時の事にあらず、永久の事也。清國和を請ふて戰を已むるの後も、我政府は決して此勅令を改むべきものにあらず。唯だ清國在留日本人民と、清國との關係に關して、戰後別に條約を規定せざるべからざるのみ。而して吾人は戰後の條約に於て、歐洲强國が清國に對して締約せる條約と、同種の約を結び、其從來彼に許して我に許るさゝる開港の貿易權をも獲取し、同じく彼に寛にして我に嚴なる內地通關稅（厘金稅）をも廢せしめざるべからず。此の如くんば吾人は我社會の治安を害すべき清人を一ヶ所に制限して、而して吾人は十分に自由を有す。聊か以

て歐米政治家の深憂大患たる清人の毒を、未萌に防ぐの功あるを得ん。

第三、臺灣島を割かしむべし。清國若し其長夜の眠より醒覺するの日あらば、必らずや都を漢口に移すに至らん。夫れ今の北京は、胡騎蒲幽幷と歌はれたる幽幷の地にして、清朝の起るや北胡の憂あり。南方支那未だ鎮定に歸せざるを以て、此に都したるのみ。然れども今や長城の外、時に草賊の憂ありと雖も、亦た代朝革命の憂あるなし。好し、雲國南下の憂あるも、鐵道は已に山海關に通じて、往く〳〵吉林府に通ぜんとす。故に憂ふる所は此にあらずして南方にあり。南方は湖南一帶の地にして、大平賊討滅の役、曾國荃、曾國藩、

左宗棠の徒、輩出せしを機として、清朝の權臣多く此地方に出づ。彼等は北京朝廷の權力絶大にして、之より賴りて功名富貴を得る間こそ、忠義なるべけれ、國難重れて到り、山林の英雄、彼を蹶て起つの日、最も北京の憂を爲すものは、必らずや湖南地方にあらんとす。去れば若し新たに都を定むるの時あらば、四通五達なる漢口によりて、以て南北を制するの日あるは決して疑ふべからず。曾國藩の獻策また此にあるし也。此時に方りてや威海衛、旅順口、は最早恃むべきの天險にあらずして、福州の港灣こそ最も其の恃む所とならん。而して臺灣は實に遙かに此都府を控制するの要地也。吾人は戰勝の威によりて、此の要地を割かしめ、以て他日の戰に我兵の屯所

を作るの地を爲さゝるべからざる也。

吾人は此三個の條件を要して、速に戰を決せんことを欲す。吾人の大願望の遂ぐる、猶ほ數戰の後にあらざるべからず。吾人は一戰ごとに己を肥すの策を爲さるべからず。彼の一戰によりて、後兩國の大平和を得、百年替らざるべしと云ふが如きは迂腐の見、取るに足らざる也。

第九　進んで世界の舞臺に上るの時也。

吾人は已に清國に對して懲伐の師を出す。最早や亞細亞に蟄居すべからず。進んで世界の舞臺に出でゝ、歐洲の强國と、袂を聯ねて周旋すべし。亞細亞に於ける日本を、世界に於ける『大なる日本』とならしむるの大業此の如くして初めて成るべき也。

夫れ清國の兵備修まらず、武器精ならず、軍紀振はずと雖も、四億萬の民、四百餘州の國、一擊にして其肺腑を刺さんには、餘りに强大也。況んや疎漏と雖も、レミントン銃を有する五萬の兵は、北京近傍の張家口にあり。七萬の蒲州兵は、齊々哈爾（チ、ハル）と、奉天に分屯せ

り。土耳其斯坦兵二十萬は、歐亞の區界にあり。北洋、南洋、福建、廣東、の四艦隊は、廣乙操江を失ふも、猶ほ四十六隻、六千七百噸を有す。我軍隊の勇武、精英なる、幸に勃海の固を破つて、天津を衝くも、長驅直に北京を突く能はず。處々の道途に營戍を置かざるべからず。糧食運送の便なかるべからず。輜重護送の兵なかるべからず。挺身して北京を衝くの兵は、極めて大數なる能はざる也。是れ吾人が豫じめ計らざるべからざるの差引也。

然れども吾人は深く我軍隊を依信す。其北京宮城に日章の大旗を掲ぐるの日。決して來らざるを憂へざる也。唯だそれ北京已に陷つて、而して事局尚ほ結ばずんば即ち如何せん。外交の局に當る者、今日

に方つて豫め大策を畫して、以て之を待つにあらずんば、吾人は其の臍を噬むの悔あらんことを恐るゝ也。

我軍隊の精銳勇武にして、我算策の深遠通機なる、何ぞ故らに之を數ふるを須ひん。我吉野、浪華、高千穗の三艦一たび南陽灣に入るや、清遠傷きて遠く逃遁し、廣乙は自ら燃燒し、而して操江は降りて高陞は沈む。我大島少將一たび牙山に向へば、清國が世界に向つて誇揚する所の仁字毅字の二軍、全力を注ぎて成歡を防守せるに係らず、一擧して之を走らし、京城以南また清軍なからしむ。其勇怯、强弱の數、業に已に明かなり。彼れ假令ひ遼東の廣漠無人を固めとするも、假令ひ脚を沒するの秋雨を恃むも、假令ひ糧糧の盜兵を放つて、綠

林的妨害を試みしむるも、假令ひ渤海の固を恃むも、假令ひ太沽、白河の要塞を恃むも、勝兵の向ふ所天下敵なし。我軍、長驅、深入、北京を取るの力あるを信ぜんと欲す。唯それ北京を取るは、最後の目的にあらず。北京を取るは、最後の事業にあらず。北京は以て天下に號令するに足るの地に非ず。北京を取るも清國征伐の事局、之れと共に收まるものにあらず、我軍隊、已に北京を取るの後、事局猶ほ收まらずんば、我政治家は果して如何せんと欲する乎。果して何等の廟算を以て事局を收めんと欲する乎。

不幸、過去の歴史によりて未來を卜するに北京の占領は、必しも事局の終とならざる也。近くは千八百六十年英佛同盟軍が五十三艘の

運送船に二萬人の兵士を乘せて太沽より攻め入るや、清軍の恃む所は龍譎大言の客將、僧格林沁（ナムコレリンシン）と、弓馬刀劍及び粗製の銃砲のみ。故に戰鬪と稱すべきほどの戰鬪なく、連戰連敗、遂に北京を占領せらるゝに至りしと雖も、其皇帝は此にあらずして疾くに避けて熱河にあり。和議容易に整はざりき。此時にあたりてや清國の軍備は、粗雜亂暴を極め、國初以來の兵籍あるのみにして、士大夫驕惰、一劍を揮つて敵に赴く能はざるものなり。海軍の如きは一の軍艦すら之あらざりし也。而かも韃靼騎兵と、天寒已に至らんとするを恃みとして、曠日持久の間に英佛二軍を苦しめんとしたりき。若し英佛二軍にして圓明園の財物を奪はず、之を燒滅せず、絶大の償金を求め

しめ、而して國境の圍少しく恃むべからしめ、多少の文明的兵士を有せしめ、強國の一二と外交的聯結を作るの智識と膽勇とを有せしめ、湖南地方の恃むべき今日の如くならしめば、彼れ豈に容易に和議を唱へん耶。積雪脛を沒し、堅氷鬚に在り憑凌たる殺氣、天地に充つるを恃み、大に其の蒙古的戰略を逞ふしたるや疑なき也。幸にして昇平の夢、士大夫を腐敗せしめて、恃むべきの軍士なく、湖南の地、民心清朝に利あらずして恃むべからず、英佛二國千里懸軍の不利を知つて要求を穩當にせると共に、露公使イグナチーフの和を勸めたるが爲め、和議は遂に締結せられき。今や英佛同盟軍の時に異なり、ガンユガルの地、吉林の地、土耳機斯旦の地、已に文明の兵器を有

するの軍士あり。北洋、南洋、廣東、福建の水軍あり、北京近傍には李鴻章の練軍あり。彼等は走りて恃むべきの軍隊を有する也。彼等は外交の智識を得たり。歐洲强國勢力の競爭に乘じて之を利用するの道を知れり。湖南の地は長髮賊以來、北京朝廷に名臣大族を與へしが爲め少からぬ清朝の擁護者を生じ、之に走るも決して危險なきの勢となれり。而して之に加ふるに我要償は英佛二國の要償の如く小なる能はず。吾人は深く恐る、我軍、長驅して北京に入るの日は、其皇帝の宮殿已に空虛となりし日ならんことを。若し果して此の如くならしめば、北京の占領は決してその局の終焉にあらずして、却つて更らに一難局を開くものにあらずして何ぞ。

皇帝主權者が遁逃を以て其政策となし、崇座の間に國祚を延ばさんと欲するは、英佛同盟軍の時已に其の例を示したり。遠くは東晋西晋以來、明朝に至るまで歴代の皇帝皆な、遁逃を以て其の策とせざるはなかりき。而して其國土の大、道路の險、通信の緩なる、遁逃の間猶ほ能く二三十年の歳月を支ぶるに足らしむ。北胡が其全族を擧つて入寇し山川草木、皆な胡氣を帶びしむるも猶ほ敵朝をして其遁逃を逞ふせしむ。史家、露國皇帝アレキサンドルがナポレオンの侵入に遇ひ、モスコウを燒きて、遠く北地に退きたるを以て絶大の偉零となすも、實は必ずしも非常の軍略に出でしにあらず。是れ北人が其自然的必要より考へ來れる普通の策畧のみ。咸豊帝が北京を去て熱河に逃れしも之に近し。亦た何ぞ我兵の侵畧に逸ふには豫じめ沿道の民家を燒き、北京の民を追ひ散し、野を清めて糧食、馬匹、家屋なからしめ、冬天の殺氣と、饑餓と豪盜と、を以て我れを苦しましめんとするなきを保たん耶。彼れ若し此策に出ん乎。我、彼の皇帝を追はゞ旋轉止る所を知らずして奔命に疲れん、若し彼の皇帝を追跡せざる乎。事局茫々として收まる所を知らず、我國民、軍國の費に疲れん。此に至つては我軍隊の勇武精銳も及ばざる所あり、計策の深遠入機も達せざる所あり、軍國の事、更らに一轉して外交の局面に返らざるべからず。

大抵論者、日清の關係を論じて、某の事より某の事に至る間は、外

交時代にして、某の事より某の事に至る間、參謀時代と爲すと雖ども、是れ甚だ不通の論也。如何なる場合に於ても外交は已むものにあらず、兩軍突貫、流血杵を漂はすの時と雖も、外交は已むものにあらず。外交と軍事と、猶ほ綸へる繩の如し、旋轉交錯、決して之を區分し得べきにあらざる也。何ぞ軍隊獨り突進して、政治家、呆然として手を收めて傍觀せざるべからずと云ふ迂愚なる規定あらん耶。例せばウ井リヤム、ナレンヲ公が、佛國の驕凌を挫かんとして、兵を出すや、外交の術は歐洲列國の新敵同盟を作りて、以て其兵勢を助けしめたるにあらず耶。而して佛國の之に對するや、また外交、戰鬪交も至り、敵國同盟を誘かして、我に應ぜしめ、以て我軍備を助

けしめたるにあらず耶。米國獨立軍の如き、英の露に對するが如き、近くは佛の清に對するが如き、獨り軍隊をして其爲す所を爲さしむるのみならず、外交は常に我軍隊以外の勢力を延き來つて以て、我を助け、我が戰線をして、徒らに延大ならしめず、收拾に苦しましめず、速に事局を結ぶの策を建つ。我國家、獨り、軍隊をして其爲す所を爲さしむるのみならず、外交の技倆もて常に我軍隊の爲め難關を排し、我戰線の徒らに延長するを防ぎ、國外の勢力を鼓舞して以て我軍隊を援けしめざるべからず。

北京の皇帝遠く遁逃せん乎。吾人は英佛二軍の爲したるが如く、我軍隊の通過する土地を以て我領地なりと爲し、我政令を布かん。此

時に方つて、或は版籍を抱きて我に走るの策士もあらん。其人民の或る者は、我令嚴にして法犯さゞるを悅ぶものもあらん。然れども其大多數は我に對して、靖獻遺言的の復仇心を有するものなるを忘るべからず。而して侵寇の勢、一旦止りて土地の占領となれば、我軍却つて防備の地に立ち、戰線徒大となるを忘るべからず。思ふに如何なる艱難も、如何なる辛苦も、如何に廣き戰線も我勇武なる軍隊は能く之を守らん。然れども事局此に至りては我政治家にして外交の局面を一轉して、以て乾坤一擲の大活劇を試むるにあらずんば、徒らに我軍隊を疲らするの責を免れざる也。

我國民は徒らに勝利に醉ふ勿れ。一國の戰は街上少年の軍に異なり、

一打擊、一創傷の能く事局を收むるものにあらざる也。我勝利能く清國を疲さん。然れども明治十七年福州馬尾の戰に、佛軍、清國の砲台を破碎し盡くし其の軍艦を擊破して沈沒せしむる十一艘に及び、歐洲近世にすら稀有の大劇戰を演じたるに係らず、北京の米價は一錢を上せざりしと云ふにあらず耶。一國は一打擊の取る所にあらず、況んや廣大無比、歐羅巴全洲に匹敵する一大帝國をや、旗を北京に樹つれば吾事足ると思ふが如きは、清國の事情に迂なるの言たるを免れず、常人之を言ふ猶ほ可也。若し政治家にして此の如き思想を抱くものあらば、汲々乎として危ひ哉。吾人は決して勝利に醉ふべからず、吾人は事局の何の處に收まらんかを思慮し、如何にしてこ

の局を收むべきかを案ぜざるべからざる也。

故に吾人は北京を衝くの壯絶快絶なるを感じ、我軍隊が、必らず此の壯擧を遂ぐるの力量あるを信ずると共に、萬一清帝にして、三十六計の奥秘たる遁逃策を取つて、餘生を浮浪の間に保つ乎。若しくは一旦降旗を建て金貨五億萬弗の償金、臺灣の割與、新條約の締結、を諾すと雖も、五六年にして再び、葛藤を生ずる乎。二者の變に應せんが爲め、遠く籌策を回らすは、政治家今日の急務たるを信ず。

而して吾人は清國をして、絶躰絶命の境合に陷りて、悉く我要償を聽かしむるの策として、日、露、佛の間に攻擊同盟を締結し、露國をして支那の北境より進ましめ、佛國をして、安南の境より進ましめ、以て遙かに清國を三分するの勢を爲さしむるを以て、最も有効の策なるを信ず、而して其の必らず出來得べき策なるを信ず。

請ふ試に之を論ぜん乎。

近時獨逸、墺太利、以太利の三國が、攻守同盟を組織して、以て佛露の二國に當らんとするは、已に世人の熟知する所也。而して英國は此三國同盟に加入せずと雖も、三國同盟の利益を享受するが爲め、露佛の二國は、英國と三國同盟とに對して、露佛攻守同盟を組織したり即ち露佛同盟の目的とする所は、重もに歐洲に於ける獨逸の强權を抑へんと欲するにありと雖も、露國に取りて最大の目的は、三國同盟の幕後にある、英國を打擊せんがために他ならずして、佛國は

露國が英國に備ふるの心あるを利用して、之を延きて、同盟を結び、以て其最大敵手たる獨逸の後を踏ましめんとす。然らば即ち佛國は獨逸のみを敵視するかと云ふに、また決して然らず。彼が英國を嫉視するの情は、露國に劣らざる也、彼れルイ十六世の使僧ピグノウの手を介して、安南に於ける內亂勘定の權を得たる以來、世は共和となり、帝政と變じ、再び共和となるも、安南地方に一大國を建てゝ、以て英人の印度帝國に對抗せんとするの心は、一日も止まらざる也。然るに英國は常に安南、サイゴン暹羅の土人を煽動し、支那と聯結して、陰に佛國の企圖を遮つて已まず。此に於てか、佛人は東洋に於て驥足を伸ぶるの事業を思ふ毎に、未だ嘗つて英人の妨害

を憤らずんばあらず。加ふに英國が以太利の海に多數の艦隊を浮べて、以て暗に佛國を控制して、以太利を鼓舞し、以太利をして長く三國同盟を脫せざらんとせしめたるが如きは、佛人の骨髓に徹して、忘るゝ能はざるの事實たり。而して英國と支那とは、其佛領安南に對する共同利害よりして、常に相結托するを見て、英清の二國を以て、佛國の東方政畧を妨たるものと爲して、一日も忘るゝ能はざる也。然らば即ち英國及び歐洲の三國は果して何の時を以て露佛と戰端を開くべき乎。恐らくは容易に聞かざるべし。列國各々帶軍百萬、寸土を得んがために萬骨を枯さゝるべからず。是れ決して歐洲の事情、軍隊以外の社會によりて作らるゝ事情の許るさゝる所なるべし。然

らば即ち彼等は遂に戰はざる乎。曰く否な。彼等は斷じて戰はん。唯だ戰爭は意外にも、最も抵抗力なき三國同盟及び英國と政治上の同盟なき地方に向つて戰はれん。即ち彼等は支那を誘ひ、若しくは之を擊つて戰鬪力を失し、再び二國を控制するの力なからしむるを以て、東洋に於ける英國の勢力を殺ぐものと爲さん。何となれば、英國は清國を以て、殆んど其先天の味方と信じ、撫弄瀧存百方之を誘ふて以て、己の勢力を作りつゝあれば也。例せば中央亞細亞に於けるパミール高原の問題の如きは、英國は一方に於て、露國と相爭ふと共に、暗に清國を挑發して、露國と爭はしめ、露國をして奔走に疲れしめたるが如き、また露國に接するクルヤの地を清國官吏に

一任するを以て、不安心なりとなし、英國の領事を置かんと主張したるが如き、また常に安南暹羅に於て、支那の勢力を利用して、以て佛國を苦しめたるが如き、其事例の最も明かなるもの也。故に露佛の二國は、支那を誘ひ、若しくは之を擊破するを以て、最も英國に對して有効なる報復なりと信ずる也。而して之を擊破するは歐洲の分野に、何等直接の變動を及さゞるを以て、最も安然なれば也。果然露國は、先づ清國を誘はんと欲したり。北京在留露國公使カッセリ伯は北京の朝廷に周旋し、清國が未だ萬國電信會議に加入せざるにも係らず、其の電線を露國線に連接せしめ、其の歡心を得ると共に、露國は朝鮮に於て全く自由を清國に與ふるの報酬として、

パミール問題に因して、清國は全く露國に抗せざるの約を結びたる事是也。然れども清國は朝鮮に於て自由を得たるも、此自由は已に日本の專領する所となれり。露國は已に得る所を得たり。清國は已に失ふ所を失ふたり。此の約束は已に實買濟となりて消へ去れり。決して露清の好意を、長く保つの具とならざる也。否な露國の希望の大、且つ强固なる、已にパミールを得るも、之よりも更らに大なる獲物あらば、彼れ豈に猛然として其翼を振はざらん耶。彼若し日本と攻擊同盟を約し、我が軍隊が北京を衝くの時に方りて、サンガリヤに入るの要地たる歴史上の爭地クルサヤを得、長驅して其多年望む所を得るの望あらば、彼れ豈に悠然として、來つて同盟に入ら

ざらん耶。

佛國に至りては、清國を誘ふの線因あるなし。唯だ之を擊つて取るの外なき也。彼れ已に安南を略して、以て東洋に於ける其勢力振作の起心點と爲す。然れども安南は其單一の望にあらず。實に之れによりて以て鎭南關以東、雲南、四川等、天産に富みたるの地、即ち古の巴蜀以西一帶の地を得んと欲するにあり。曾て此地方に鐵道を布き、以て他日の計を爲さんとして、清國のために支られたりき。然るに英國もまた、雲南四川の富に垂涎し、其領土英領緬甸のマンダレーより、東北に向ひ、雲南四川の各地に鐵道を通じ、以て横さまに支那を斷じて、其利を吸集せんとせること已に久しく、英佛の

利害は互に衝突したれば、兩國の使臣相ひ沮格すること深し。されば佛國は逸早く他の方面より英國に先んぜんとして、ベウイエを首として一隊の探檢隊を組織し、緬甸雲南の地を跋渉せしめ、以て先づ發すべきの地を測量せしめしが、現今暹羅に屬するラヲ及びシアン種族の地は元來安南より奪ひたるものなるを發見し、遂に之を奪回せんとして此に一場の混亂を生じぬ。然に此地にして一旦、佛國に屬せば、英國と益ず緊接なる利害の爭を生ずべければ、英國は百方之を妨げんとして、暹羅を助けつゝあるは、明白の事實也。勢此の如し。清國一旦我と事あり、佛國を支ふるの力薄きに方りては、彼れ豈に英人と干格するの道を避けて、直ちに清國に入つて、其の

望を充たすの策に出でざらん耶。佛國の我同盟に入るや、其利害は露國よりも更らに殷なりと云ふべし。現に此文を艸するの時、佛國は正しく事を安南に起さんとすの報に接しぬ。此の如き利害を有する佛國と同盟を締結する、流に從つて下るが如きものある也。且つそれ佛國の我に對する依信は、決して淺からざる也。明治十八年、佛國が福州馬尾の砲臺を擊つに先ち、其提督クールベー一日領事の服を着け、從者を率へて砲臺を一見す。從者の中、一の日本人あり。私かに指端を以て砲口を量るや、クールベー笑ふて其肩を叩く、相見て歡然たり。已にして數十日の後、佛國我を誘ふて、攻擊同盟を作らんとせしも、遂に我退くる所となりき。彼等は我軍隊を以て、

天晴れ精鋭比なきものと識認し、彼の海軍と、水陸相并びて、以て一快戰を試みんとするや久し。佛國は實に、我同盟として、恥かしからぬ、友情と依信を我に表するの國民也。

此の如して同盟成らん乎。佛國は鎭南國より進みて西蜀の地を徇へ、露國はクルヂヤより入つて北清の地を徇なひ、而して我軍直に、北京皇帝の後を追ふ。豈に唯だ我三條の要償のみと云はん耶。豈に唯だ清國三分の策と云はん耶。亞細亞の日本は、『世界の大日本』たらざらんと欲するも得ざる也。此時に方りて條約改正それ將た何ものぞ。

或は曰く露佛二國と結托して亞歐に跨り三國同盟を作る、快は即ち

快、然れども誰か英國が清國を助けざるを期せんと。吾人は斷言す英國は決して此の決心ある能はざる也。若し清國を助けんとせば、獨り東洋の天地に於て戰ふのみならず、歐洲の天地を焦土と爲すの覺悟ならざるべからず。吾人は決して此事なきを信ず。否な英國の東洋政策は、日に衰退す。殆んど强弩の末、魯縞を穿つ能はざるが如し。何ぞ此の大決心あるを得ん耶。英國は疾妬によりて重負を負ひ過ぎたり。露國の南下を嫉みて、土耳古の重荷を負ひ、佛國の大國建設を嫉みて、暹羅の重負を荷はんとし、敵國の發達を妨ぐると共に、己れの戰線を廣むるに過ぎたり。彼れ豈に此上に清國の重荷を負ふの愚を爲さん耶。

然りと雖も吾人は彼の來らざるを恃まずして、我の力以て彼を待つに足るを恃む。吾人若し亞歐の三國同盟を作る乎。英國にして來らば好しまた快戰を辭せず。佛國の海軍、近年天下に比なし、其器械の精銳にして、其兵士の勇毅なる英國海軍もまた讃認する所にして、佛國東洋艦隊が機械砲を備ふるや、英人は之を笑ふて新奇に走るを尤めたりき。已にして馬尾の戰、佛軍の敏活、なる瞬間にして十一艘の清艦を擊破せしむるを見るや、英國の東洋艦隊は一齊に率へて國に歸り、機械砲を据へつけて歸りしが如き、事々物々、佛國を師とするを見るべき也。若し英國にして亞歐に跨る三國同盟に敵せん乎。決して英國の利益にあらざる也。何ぞ英國の政治家にして、此

利害に暗しと云ふべけん耶。

吾人は久しく英國的報道のため、露國を誤解せり。英人が露國を惡むは其分也。日本人民にして其憤疾を分つは、無用の事也。吾人は今にして露國の眞事情を解すべし。決して無用なる疾爭の情を皷して、以て我與國を遠くべからざる也。吾人は久しく佛國に遠かれり。吾人は久しく獨佛戰爭史に醉ふたり。獨人にして醉ふは可也。日本國民は、冷靜に事後の形勢を見て、チヤールスダルクすら、他日の大戰必らず勝利なるべしと兼言せる佛國に親しむべき也。吾人は勝利者なるが故に、親しめと云ふにあらず。彼れ我與國中の與國なれば、初めの友情に歸れと云ふ也。

第十　二十世紀の新『權力平均』

我國民に一大疾病あり。世界の强國を厭惡する也。厭惡猶ほ可也。徒らに之に觸るゝを恐怖するに至ては、殆んど政治的神經病と云はざるべからず。而して世界に『大なる日本』を建つる興國の大業を妨ぐるもの、實に此神經病の爲めに、世界の强國と手を携ふるを以て、小女が惡魔の傍に近よるが如く、後患計るべからずと爲すの杞憂に外ならず。吾人は古今の事態を數へて、返す〳〵も此杞憂を排擊するの、已むべからざるを感ず。

吾人は已に海中の島國にあり。苟も艦隊を有するの國は、即ち我隣

國也。吾人は已に北方に於て、露國と一葦の水を隔つ。吾人が露國と接する、何ぞ必しも、支那征伐の爲めに同盟して、後ちに相接近するものならん耶。吾人は同盟するの前に、接近して恐れず。何ぞ同盟して後、初めて恐るゝを用いん耶。若し强國と相携るを恐るべしとせば、十六個國との修交條約は已に相携へしめたるもの也。何ぞ今に及びて後ちに恐れん耶。

吾人は英人のために、久しく露國を誤解せり。吾人が露國に關する智識は、多くは皆な英人の手英人の著書を通じて得たるもの也。其の露國を以て恐るべく、惡むべく、忌むべく、排すべき國民となするもの、露國若しくは佛國の通信著書を通じて得たる智識、幾何か

ある。多くは皆な非露的感情に充溢し、眩惑せられたる英國的智識の古手たるに過ぎず。吾人は露國を誤解すべからず。吾人は英國を恐れず。何ぞ露國を恐れん。吾人は佛國を恐れず。何ぞ露國を恐れん。吾人は其廣大に於ても、其勢力に於ても、而して地勢に於ては、更らに露國よりも數十歩の形勢を占めたる支那を恐れずして、之を夷平せんと欲す。何ぞ露國を恐れん耶。吾人は一國民として相當の待遇を與へざるべからず。漫に之を恐怖して、他の強國よりも恐るべく、慮るべきものと爲すは、是れ國民を擧つて、津田三造然たる神經病に陷るものにあらずして何ぞ。

且つそれ露國の強なるもの、果して幾何ぞ。土耳古が宮廷の腐敗と

寵臣の爭鬪と、兵制の不振とを以て、之に立ち向ふたればこそ、一敗地に塗れたれ。其戰爭は、決して名譽ある戰爭にはあらず。其軍隊は常勝軍にはあらざりし。却つて其勇武精悍の點に於て、ヲスマン侯の土兵に劣ること數等なりしは、歴史の示めす所也。セバストポールの攻守は、近世の一大劇戰と稱するも、露兵は天險に據り、數陪の兵を以て、英佛の攻擊に堪へずして、大敗死傷、全軍殆んど顚覆せんとしたるは明白の事實ならず耶。吾人は勇怯强弱に於て、何の彼に憂ふる所かあらん耶。若しまた兵の多少を云ふ乎。人工は天險を夷ぐる能はず。如何に西比利亞鐵道を成就するも、空疎なる人烟は、千歳にあらずんば充たす能はず。猶ほ千里懸軍の不便を免れ

ず。之を如何ぞ我軍境を出る四日已に天津に上るに比すべけんや耶。

吾人は漫に大國と接近するを恐るべからざる也。

我國民已に形勢を審にして、漫に杞憂せず、世界の舞臺に上らん乎。吾人は實に世界の歴史を一變し、十七世紀ウエストファリヤ以來繼續せる權力平均の分野を一變して、二十世紀と共に、新たに權力平均を初むるを得べき也。吾人は之を思ふごとに、自ら十七世紀のスウィデンに似たるを思はずんばあらず。十七世紀の墺太利は、恰かも今日の支那に似たり。其歴史上の緣因によりて、以太利を有し、日耳曼を有し、佛蘭西の一部を有し、歐洲の大部分を統轄すると共に、舊教を代表し、舊文明を代表し、傲然として飽までも新主義

を窘殺せずんば已まざらんとす。已にして新教國とボヘミヤ國の王冠を爭へり。新教國は擊たれたり。兵力四散して軍已まんとするとき、スウィデンのガスタバス、アドルフアス王、突として、一隊の兵を率へて、バルチック海より墺太利の帝國内に侵入し、公然新教の爲め、ボヘミヤの王冠を爭ふて、墺太利を攻むるを聲言す。ヴインナ府の士民は嘲笑しぬ。嶋國の小王、何を爲さんと欲する乎。北國氷王は、朝日の光に溶解せずんば幸也と。圖らざりき新教の王は、獨り新教を代表するのみならず。新文明を代表する一大首領にして、墺國の兵士が歴史上の緣因に誇り、要もなき鎧を着、飾に過ぎざる軍紀を守り、傲然自ら足れりとする時、彼は輕裝、自由、嚴肅なる

軍隊を以て、星馳電擊、至る所の州郡、風を望んで下りしかば、全歐之が爲めに震驚し、風雲四方より起りて、此に初めて『三十年の大戰』となり、遂にウエストファリヤの列國會議となり、生民あつて以來、初めて權力平均なる一大萬國交際法を發明するに至りぬ。權力平均なるものが、全く歐州の禍亂を救ふ能はざりしも、爾後二百年間の大亂を制肘したるもの多きや、瞭々として明かなり也。

吾人の位地は、如何にスウヰデンに似たるぞ。支那の位地は、如何に墺太利に似たるぞ。等しく新舊二大主義の爭也。等しく小大の爭也。等しく島國と大陸との爭也。而して等しく、小且新なるものの勝利たらんとす。吾人若しスウヰデンが佛國、其他の大陸的勢力と結托

して、以て其目的を成就せんとしたるが如く、勇進、邁往、天下の勢力と相結托するを得ば、第二のウエストファリヤ會議を東洋に開きて、第二の『權力平均』を作る、それ豈に難からん耶。

嗚呼歐洲と轡を幷べて走するの時は來りぬ。大なる日本の曙は已に近かづきぬ。誰か之を以て書生の大言と爲すものぞ。大言と爲すものは歐洲と袂を聯ぬるを以て恐るべしとなす臆病心より出づるもの也。亞歐に跨る三國同盟を作るの意氣なくんば、北京征伐は企つべからず、北京征伐の氣力なくんば、朝鮮を經營すべからず。我軍一たび海に浮ぶの日は、世界の舞臺に上るの覺悟なかるべからざる也。此の如くして成る乎。此の如くして敗る乎。人事を盡くして天命を待

つ、皇天の攝理は、正義にして勞する者の上にあるや疑ふべからざる也。

支那論 終

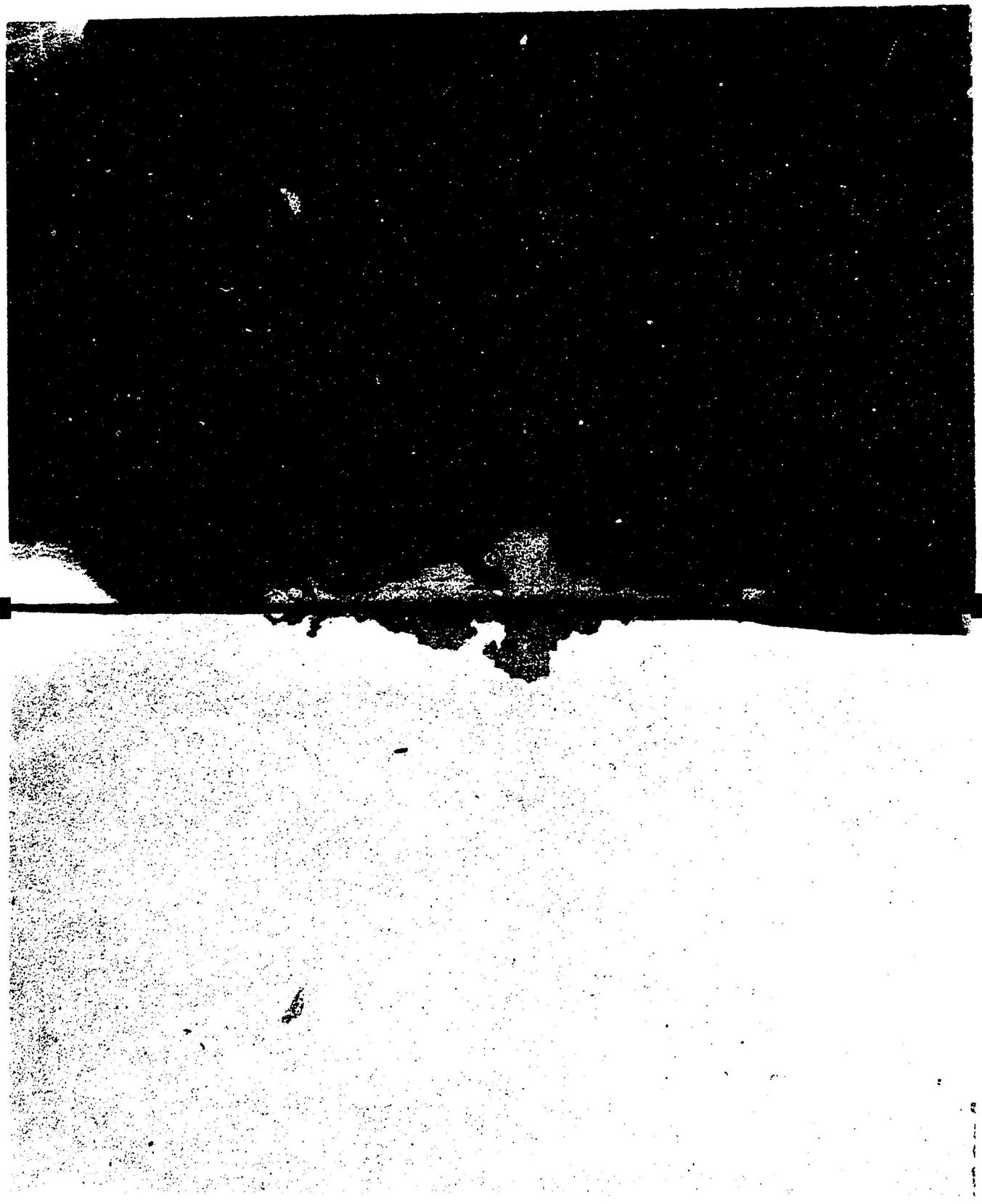
明治廿七年八月廿四日印刷
明治廿七年八月廿七日發行

定價金十錢

著作者 東京市麻布區霞町二十一番地 竹越與三郎
發行者 東京市京橋區日吉町四番地 垣田純朗
印刷者 東京市京橋區西紺屋町二十六番地 山本鐵次郎
印刷所 東京市京橋區西紺屋町二十六七番地 株式會社秀英舍
發行所 東京市京橋區日吉町四番地 民友社

版權所有

2 / 300



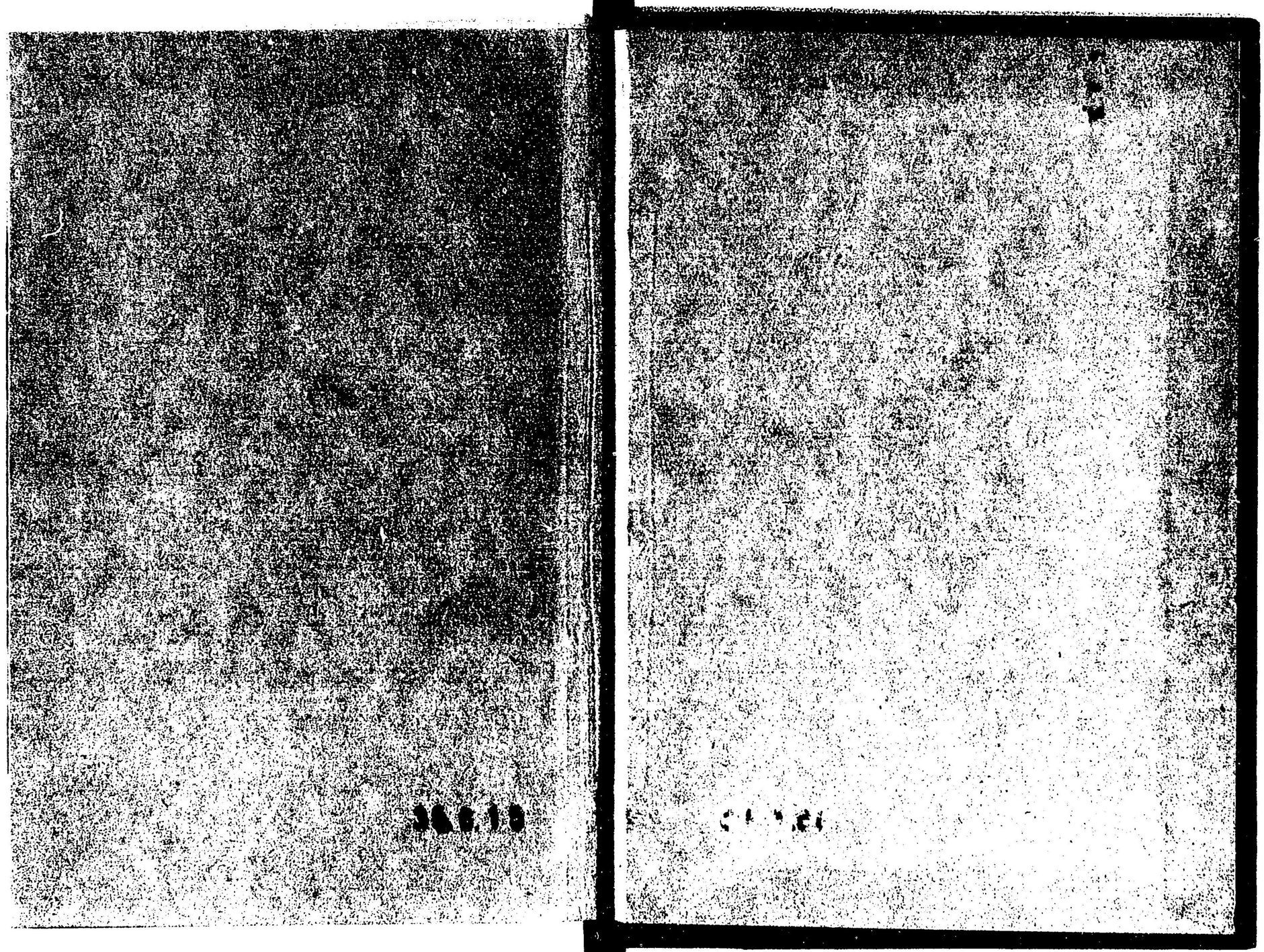
71
245

027898-000-8

71-245

支那論

竹越　与三郎／著

M27

BAA-0312